

特別支援教育研究論文集

—令和3年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

多様性を尊重し、互いを認め合える児童の育成
～オリンピック・パラリンピック教育を
通した障害者理解を軸として～

東京都調布市立飛田給小学校

主幹教諭 岩田 順子

令和4年3月

公益財団法人みずほ教育福祉財団

目 次

要旨	1
第1章 研究の概要	2
第1節 研究主題について	2
1 研究主題	
2 主題設定の理由	
3 障害者理解教育の目標	
4 障害者理解の段階	
第2節 目指す児童像	4
1 学校全体で目指す児童像	
2 発達段階に応じた目指す児童像	
3 具体的な姿	
第3節 研究の仮説	4
第4節 研究の構造	6
第5節 研究の経過	7
第2章 研究の内容	8
第1節 障害者理解教育に関わる全体計画	8
1 学校全体計画	
2 障害者理解に関わる全校活動計画	
3 各学年の年間指導計画	
4 研究授業	
第2節 日常の取組	17
1 ぐるえんタイム	
2 日常の取組	
3 学級経営	
4 校内の特別支援部との連携	
第3節 体験・交流活動	21
1 パラスポーツ体験	
2 道徳授業地区公開講座	
3 生活科・総合的な学習の時間の取組	
第3章 まとめ	24
第1節 児童の意識の変化	24
1 意識調査の分析（令和元年度・2年度 研究1年目・2年目）	
2 記述回答の分析（令和元年度・2年度 研究1年目・2年目）	
3 日常の言動からの気付き	
4 東京都オリンピック・パラリンピック教育アンケート調査（令和3年度 研究3年目）	
第2節 教師の意識の変化	35
1 研究スタート時の教師のアンケート（令和元年5月実施）	
2 選択肢による意識調査（令和元年度・2年度 研究1年目・2年目）	
3 日常の活動における変容	
第3節 成果と課題	38
1 成果	
2 課題	
おわりに	40

要旨

人口約 24 万人、面積約 22 ㎢の調布市の西側に位置した本校は、児童数 417 人（令和 4 年 1 月現在）、学級数 13 学級、通級指導教室拠点校の設置校であり、開校 46 年目を迎えた。地域は、住宅街であり、古くからの地元住民と新興住宅地の住民とが混在している。学校の南側には多摩川が流れ、北側には、味の素スタジアムや武蔵野の森総合スポーツプラザの大規模なスポーツ施設があり、2019 年にはラグビーワールドカップ、2021 年には東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会などの国際的な大会が開催される地域である。

本校の児童は、明るく素直で物怖じしない反面、自己肯定感が低いことが課題である。東京都の 5 年生に対して行われる調査でも、自分に対する自信のなさや、自分のよさに気付けないこと、自分自身を好きになれないことなどが、他の学校に比べて低い状況が毎年度ある。学校生活の中で自己肯定感を高めていくための模索を日々続けている現状であった。

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されることが決定した後、開催都市である調布市においても取組が始まった。本校は、大会が開催される会場に隣接している。特に、パラリンピックの車いすバスケットボールの会場が隣接していることから、パラスポーツを知り、応援することを通して、障害者理解を進める意義がある。また、「予測困難な時代」を生き抜き、多様性を尊重する共生社会の担い手となる児童には、「自分の得意や苦手なことを知り、自分を肯定する力」と「自分とは異なる環境や立場の人を認めていく力」が必要である。本校では、こうした状況から、東京都教育委員会の東京都オリンピック・パラリンピック教育を通して障害者理解を軸として、教科横断的な授業実践による研究に取り組むこととした。

研究としては、令和元年度と令和 2 年度の 2 年間、調布市教育委員会指定研究校として全学年で障害理解教育に取り組んだ。まずは、教師間で障害者理解の在り方について討議し、互いの考えを共有することから始めた。その中で障害者理解の段階について検討し、「気付く」から「行動する」までの段階を設定し、「多様性を尊重する児童」を育成するためには「自己理解」と「他者理解」を高めていく必要があることを研究仮説とした。

研究仮説にしたがって、児童の実態を把握するためのアンケートを行い、課題を把握した。その課題を基に、2 年間かけて、各学年で研究授業に取り組むとともに、学年ごとに障害者理解教育の教科横断的な全体計画を作成した。また、授業だけではなく、日常の取組も大切であると考え、グループエンカウンターの手法を用いた朝の会の企画や学級経営上の配慮等を、校内組織の特別支援部ともタイアップして取り組んだ。さらに、全校で実施する体験・交流活動も計画的・継続的に実施した。

令和 3 年度には、研究の最後の年度として、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会後の変容と、作成した全体計画を実施した児童への質問紙調査結果等を分析する。これらの成果を精選し、共生社会の形成に向けた障害者理解教育の在り方についてまとめ、研究成果を普及する。

キーワード：障害者理解教育，多様性の尊重，自己理解・他者理解，

東京都オリンピック・パラリンピック教育，パラスポーツ体験

第1章 研究の概要

第1節 研究主題について

1 研究主題

多様性を尊重し、互いを認め合える児童の育成
～オリンピック・パラリンピック教育を通じた障害者理解を軸として～

2 主題設定の理由

本校では開校以来の伝統として、校樹である“ゆずりはの木”にちなみ、「よいもの、正しいものを受け継ぎ、譲り渡していく心」、「人を敬い譲り合う心」を校風とし、「心ゆたかなたくましい子ども」の育成を教育目標としている。それを達成するための基本方針の一つに、「人を敬いゆずる心を大切にし、多様性を尊重する子どもの育成」を掲げ、人権教育やオリンピック・パラリンピック教育に取り組んできた。

東京都オリンピック・パラリンピック教育の育成すべき人間像として、「スポーツに親しみ、知・徳・体の調和のとれた人間」「多様性を尊重し、共生社会の実現や国際社会の平和と発展に貢献できる人間」の育成が目標とされている。重点的に育成すべき5つの資質のうち、特に、2018年度からは共生・共助社会の実現に向けて「ボランティアマインド」「障害者理解」「豊かな国際感覚」の育成が重視されている。また、東京都では「障害者理解」について、「障害の有無にかかわらず、ともに力を合わせて生活できる共生社会を実現するため、障害者理解の学習・体験や障害者との交流を通じ、多様性を尊重し、障害者を理解する心のバリアフリーを子供たちに浸透させる」としている。

本校学区は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の会場である東京スタジアムや武蔵野の森総合スポーツプラザが隣接しており、児童は低学年の頃から地域探検、スポーツ観戦等で、それらの施設に親しんでいる。本校では、2016年度から障害のある方からの講話や障害のある方との交流、パラスポーツ体験等を通して、全学年で障害者理解の教育に取り組んできた。それらの活動を通して、障害に対する児童の意識は変わりつつあるが、自分を含め、人にはそれぞれ長所や短所があり、互いに認め合い支え合って生活することの大切さについての理解は十分ではない状況があった。そこで、自分と直接は関係しない人であっても、また、障害のある人であっても、相手の気持ちに寄り添い、行動できる児童を育成することを目標とした。そのためには、低学年から自分のありのままを受け入れ自己を肯定する力、友達を始めとする身の周りの人々と触れ合い、理解する力を育てると同時に、障害者理解に関わる活動に系統性をもたせ、全教育活動を通して取り組む必要があると考えた。10年後、20年後の将来を見据え、互いの人権を尊重し、共に力を合わせて生活をする、共生社会の担い手を育むことを目指して本研究主題を設定した。

3 障害者理解教育の目標

- (1) 障害の特性や障害のある人の生き方を知るとともに、高齢者、外国人など様々な立場の人や自分を含めた周りの人、一人一人の理解を目指す。
- (2) 障害のある人や様々な立場の人に対して、自分とは関係がない存在、または支援してあげる存在と捉えるのではなく、自分とつながっている存在と捉え、共に生きていこうとする態度を育てる。

4 障害者理解の段階

先行文献（『始めよう！障害理解教育』水野智美）を基に、児童意識調査、体験活動の振り返りカードの記述などから、障害者理解教育の段階を本校では図1のように考えた。

1 段階 気付く

例：「本当に目が見えないんだ。」（児童の振り返りカードから）

2 段階 知る

例：「点字を1年かけて覚えたと聞いてびっくりした。」（児童の振り返りカードから）

3 段階 感じる

例：「障害があっても楽しめることはたくさんある。」（児童の振り返りカードから）

4 段階 考え、行動する

例：「安心して横断歩道が渡れるように声をかけよう。」（児童の振り返りカードから）

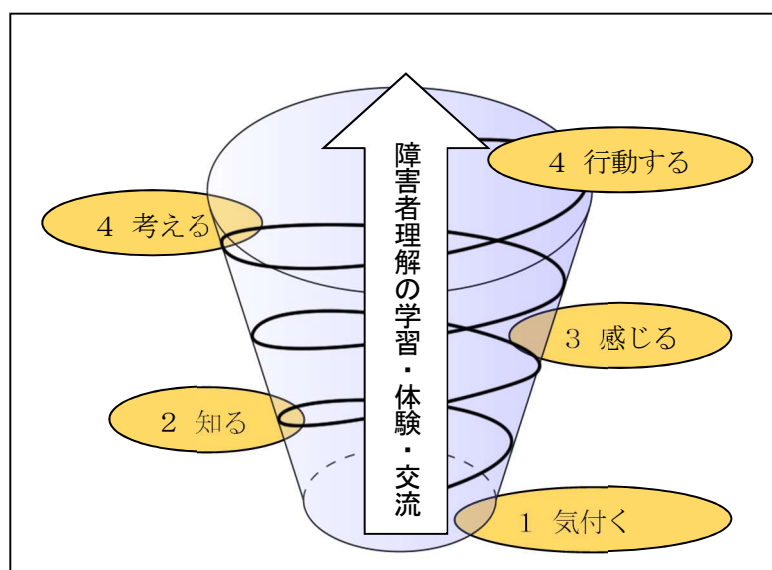


図1 障害者理解教育の段階

「2 知る」と「3 感じる」は、どちらが先ということではなく、並列の関係に近いと考えた。また、「考える」「行動する」は、日常の生活の場面で行われることが想定されるので、学校生活の場面では、「4 考え、行動する」とした。第2節 目指す児童像 で示した児童意識調査の記述で答える設問（「障害のある人との交流や体験から、どのようなことを思いましたか」）において、キーワードを拾い出した結果、1から4の段階は、障害者理解の学習や体験、交流を重ねることで進んでいくことが分かった。

第2節 目指す児童像

1 学校全体で目指す児童像

～様々な立場の人の存在やその人の気持ちを自分事として捉え、行動できる子供～

自分事として捉えるためには、状況を自分に関連付けることが大切と考える。そのためには問いや課題を見出せるように、教育活動全般において、例のような場合を想定し、児童の変容を注意深く見守りながら、適宜、児童への有効な声掛けや発問を工夫する必要がある。

例 ○自分が「様々な立場の人」になったとしたら・・・

- ・自分の家族が「様々な立場の人」になったとしたら・・・
- ・自分のクラスに「様々な立場の人」が転校してきたら・・・
- ・「様々な立場の人」と一緒に行動することになったら・・・
- ・「様々な立場の人」を道案内することになったら・・・

○飛田給の町の課題は・・・，飛田給の町をさらに良くするためには・・・

○大人になったら飛田給をどんな町にしたいか・・・

2 発達段階に応じた目指す児童像

低学年：互いのよさや違いに気付き、みんなで助け合って活動できる子供

中学年：障害について知り、自分にできることを考え、行動できる子供

高学年：障害のある人や様々な立場の人の気持ちに寄り添って、主体的に行動できる子供

3 具体的な姿

- ・自己肯定感をもち、うまくいかないことがあっても次に頑張ろうとする。
- ・友達に対して、お互いの個性を認め、受容的な態度で接しようとする。
- ・障害のある人、高齢者、外国の人など、様々な立場の人の様子を気付いたり、困っていたら声を掛けようとしたりする。

第3節 研究の仮説

○自分の得意なことや苦手なことを知り、自分を肯定する力

○自分とは異なる環境や立場の人を認めていく力

これらの力を教科横断的に、また、計画的に身に付けさせることで、多様性を尊重し、互いを認め合える児童が育つのではないかと仮説を立て、図2のように検証していくこととした。

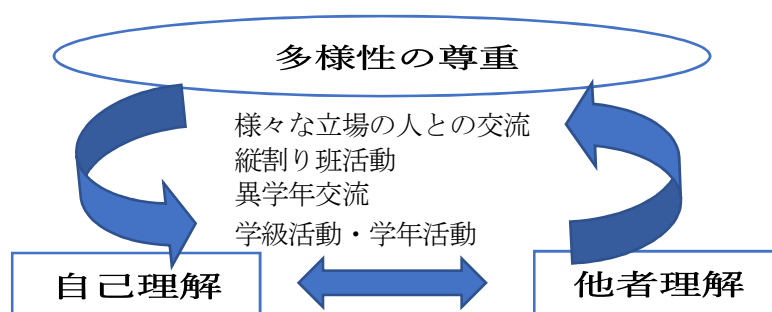


図2 研究の仮説

本校では、障害者理解とは、一人一人への人間理解と捉え、他者を理解するためには、まず、自分を理解することが大切であると考えた。自分の得意、不得意を知り、ありのままの自分を受け入れることで、社会における様々な立場の人は自分とつながっていること、それぞれに思いや考えがあるということを理解していくと考えた。本校では、地理的な要因からも東京都のオリンピック・パラリンピック教育の一環である事業を積極的に実施してきた。平成30年度パラリンピック競技応援校（車いすバスケットボール）、令和元年度パラリンピック競技応援校（車いすラグビー）、令和2年度文化プログラム等に指定され、連続して取り組んできた実績の上に立ち、さらに多様性を尊重し、互いを認め合える児童が育つことを目指すことにした。

児童の意識調査の結果を分析・集計をしたところ、図3-1のとおり、「自分にはよいところがあると思いますか」の問いに対して、「とても思う」「思う」と自分に対して肯定的に答えた児童は、「困っている人がいたら助けようと思いますか」の問いに66%の児童が「とても思う」を選んでいて。一方、図3-2のとおり、「あまり思わない」「思わない」と自分に対して否定的に答えた児童は、「困っている人がいたら助けようと思いますか」の問いに「とても思う」を選んだ児童は34%であった。この結果から、自己肯定感の高さは他者への理解や思いの深まりと関連があるのではないかと考えた。

質問：困っている人がいたら助けようと思いますか。

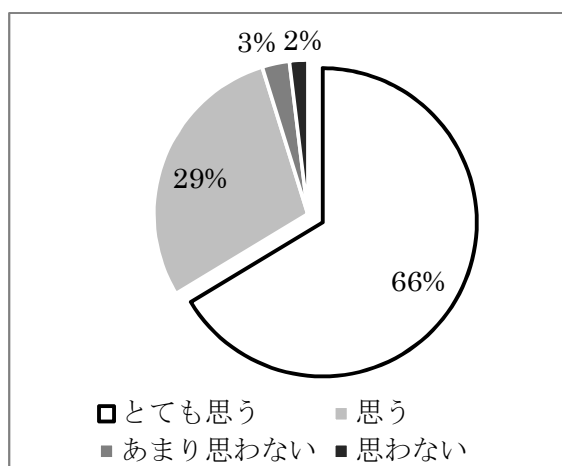


図3-1 「自分にはよいところがあると思う」児童の回答

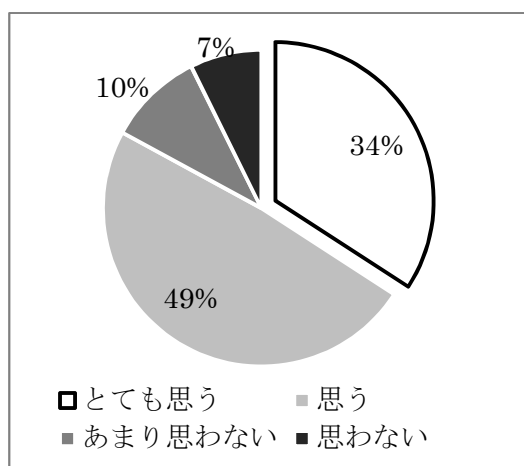


図3-2 「自分にはよいところがない」児童の回答

また、交流や体験をした直後は児童の中に様々な立場の人への理解が芽生えるが、活動のみで終わってしまうと相手に対する理解が浅かったり、時間の経過とともに活動に対する意識が低下していきたりすることが振り返りカードや児童の発言から分かった。そこで自己理解、他者理解を深める学習や様々な体験に低学年から取り組んでいくこと、それらの活動や体験を教科横断的に関連させ、計画的に取り組むことで、多様性を尊重し、互いを認め合える児童が育つのではないかと考えた。

第4節 研究の構造

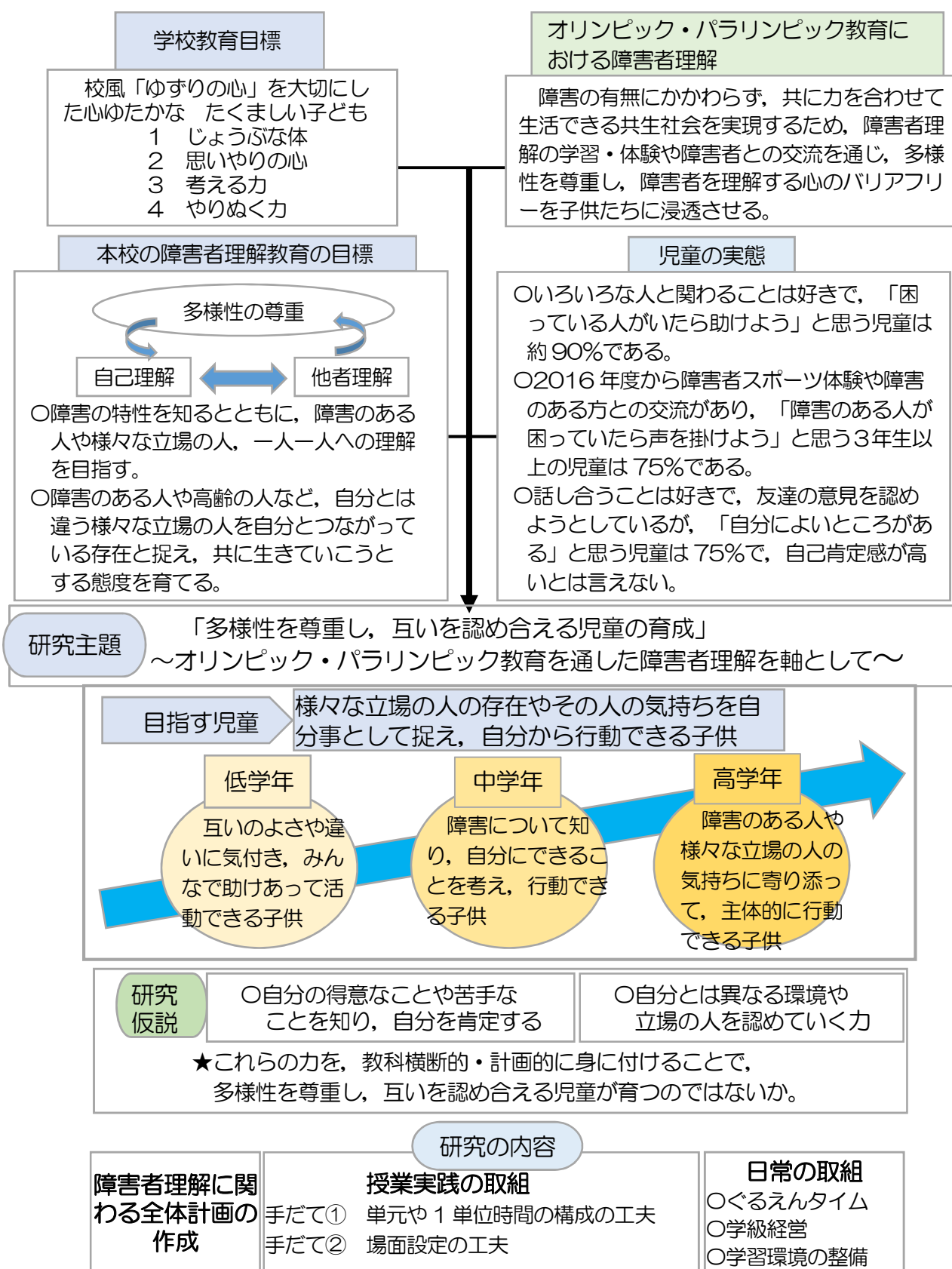


図4 研究構造図

第5節 研究の経過

【令和元年度 研究1年目】

令和元年 5月29日 講演会 「オリンピック・パラリンピック教育を通じた障害者理解教育」

講師 群馬大学教育学部 霜田浩信先生

＊教員への調査1回目実施（p37）、研究計画作成

6月26日 研究授業 第4学年 総合的な学習の時間「長生きしてね」

講師 国立特別支援教育総合研究所 伊藤由美・宇野宏之祐・杉浦徹先生

＊児童意識調査実施（p24）、障害者理解に関わる全体計画作成（p8）、
日常の取組検討

10月17日 研究授業 第2学年 生活科「あそびのたつ人 あつまれ」

講師 本校校長 山中ともえ

11月26日 研究授業 第5学年 総合的な学習の時間

「車いす利用者といっしょに楽しもう」

講師 国立特別支援教育総合研究所 久保山茂樹先生

令和2年3月～5月 臨時休業

【令和2年度 研究2年目】

令和2年 4月6日 全体会 昨年度の研究の進捗状況の確認、飛小スタンダードの確認

6月24日 全体会 研究計画の確認、ぐるえんタイムの実施計画

分科会 発達段階に応じた目指す児童像について検討

7月15日 全体会 分科会報告、指導の手だてについての検討

分科会 研究授業の計画

8月27日 全体会 2学期の研究計画

分科会 指導の手だての検討、研究授業の準備

9月23日 全体会 研究授業、協議会のもち方

分科会 研究授業準備 児童意識調査1回目実施

＊・研究紀要プロット検討、児童意識調査の分析（p24）

10月21日 研究授業 第6学年 総合的な学習の時間

「つながろう 世界と日本！日本と世界！」

講師 国立特別支援教育総合研究所 伊藤由美・宇野宏之祐・杉浦徹先生

11月18日 研究授業 第1学年 生活科「みんなのここにこ大きくせん」

講師 本校校長 山中ともえ、副校長 門田英朗

12月9日 研究授業 第3学年 総合的な学習の時間「だいすき飛田給」

講師 国立特別支援教育総合研究所 久保山茂樹・宇野宏之祐・平松源志先生

＊児童意識調査2回目実施、分析（p24）、教員への調査2回目実施（p37）

1月8日 全体会 研究収録作成

分科会 分科会のまとめ

2月12日 全体会 研究のまとめ

3月3日 全体会 次年度の研究に向けて

【令和3年度 研究3年目】

年間を通して、令和元・2年度の全体計画の実践

9月中旬 4～6年生 東京都オリンピック・パラリンピック教育アンケート実施

11月下旬 アンケート結果の分析（p33）

12月12日 全体会 研究の成果と課題について検討

第2章 研究の内容

第1節 障害者理解教育に関わる全体計画

1 学校全体計画

(1) 各学年の取組の重点

障害者理解に関わる体験や交流に学校全体で取り組み、入学時から卒業まで学習を積み重ねていけるように、各学年で、授業や活動の中で取り組む重点を以下のように設定した。主に、生活科や総合的な学習の時間で取り上げることが多いが、教科横断的に関係する教科の内容や、特別活動や日常の生活指導の中でも意識して関連付けるようにした。

この各学年の取組の重点を学校全体で共通理解し、各学年の担任は1年生からの取組が、6年生までにどのように積み重なっていくのかを見通して指導に当たった。

第1学年 自己理解

第2学年 他者理解

第3学年 地域

第4学年 福祉

第5学年 福祉と環境

第6学年 国際理解

(2) 学校全体の共通の取組と各学年の授業

学校全体の共通の取組としては、表1、表2のように、道徳授業地区公開講座、パラスポーツ競技応援校としての活動におけるパラスポーツ体験を柱とし、日常的には朝学習（ぐるえんタイム）の時間を使って、自己理解・他者理解・友達関係作りのミニエクササイズに取り組んだ。また、活動や体験は教科学習と教科横断的に関連させられるように、表3～8のように生活科・総合的な学習の時間を中心として、学年ごとに年間計画を立て、実践できるようにした。この中から、2年間にわたって学年ごとに授業研究を行った。

表1 学校全体の共通の取組と各学年の授業

パラスポーツ競技応援校としての活動	道徳授業地区公開講座	第1学年 生活科：「高齢者との交流」	日常的な取組
		第2学年 生活科：「他者理解」	
		第3学年 総合的な学習の時間：「地域調べ」	
		第4学年 総合的な学習の時間：「障害者理解」	
		第5学年 総合的な学習の時間：「環境」	
		第6学年 総合的な学習の時間：「国際理解」	

2 障害者理解に関わる全校活動計画（令和2年度）

表2 障害者理解に関わる全校活動計画

学年	内容 重点	生活科 総合的な学習の時間	パラスポーツ体験	文化的事業
第1学年	自己理解	- 自己紹介 - 自分の得意、不得意 - 学校探検（2年生との交流） - ふれあい交流会（祖父母との交流）	ボッチャ	道徳授業地区公開講座 川端成道さんによるバイオリン演奏と講話 ＊プロのバイオリニストで視覚障害のある方の演奏とお話
第2学年	他者理解	- 友達のよいところ - 学校探検（1年生との交流） - 地域めぐり	ボッチャ	
第3学年	地域	- わたしたちの飛田給（地域） - ゲストティーチャーによる講話（おはやし、消防団、宮ノ下図書館） - 副籍交流	車いすバスケットボール	
第4学年	福祉	- 高齢者（地域福祉センターとの交流、認知症サポート） - 視覚障害（点字体験、ダイアログ・イン・サイレンス） - 聴覚障害（手話体験） - 肢体不自由（車いす体験） - ユニバーサルデザインの町作り	車いすバスケットボール	
第5学年	福祉と環境	- 知的障害（わかば事業所との交流） - 障害のある人を取り巻く環境	パラ陸上	
第6学年	国際理解	- 留学生との交流 - 日本の紹介	パラ陸上	

3 各学年の年間指導計画

表3 障害者理解教育 年間指導計画 第1学年

	1 学期	2 学期	3 学期
生活科	はじまりはじまりがっこうたんけん 2年生から学校の施設について教えてもらうことを通して、学校について知る。	ふれあい交流会 高齢者の方に喜んでもらえる内容を考え、交流を楽しむ。 いっしょにいとあんしん 家族のことや自分でできることなどについて考える。	おおきくなったね1年間 自分自身が成長したことに気付く。
各教科	国語「みんなのなまえ」 友達の名前を知る。 国語「みんなにはなそう」 自分の好きなものや好きなことを友達に伝える。 音楽「うたでなかよしになろう」・「はくをかんじてリズムをうとう」 音楽を通してみんなで遊ぶ。	国語「たのしかったことをかこう」 自分の経験を振り返り、友達に伝える。 図工「はこ かざるんるん」 友達と協力して作品を制作する。	国語「学校のことをつたえあおう」 学校で働く人に質問をする。 音楽「おとをあわせてたのしもう」 友達と協力して合奏を楽しむ。
	体育 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲良く運動したり、友達の考えを認めたりする。		
道徳科	なかよくね 友達の大切さについて考え、友達と仲良くしようとする。 かぞくとおはなし 家族に対して敬愛の気持ちをもって交わろうとする。	はしのうえのおおかみ 相手の気持ちを考える。 みんなじょうず 自分や友達のよいところをすすんで見つけようとする。 二わのことり 友達のことを思うとはどういうことか考える。	あしたはえんそく 誰にでも同じように接することの大切さについて考える。 シートンとどうぶつたち 自分の特徴やよいところについて考える。
特別活動	学級活動 縦割り活動 学校行事 各活動を通して、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを克服したりしながら自己理解を深めるとともに、友達や他学年の人との関わりを通して、他者理解・相互理解を深める。		

表4 障害者理解教育 年間指導計画 第2学年

	1 学期	2 学期	3 学期
生活科	学校探検 1年生に学校のことを説明しながら、関わり方について考える。	発見！町へとびだそう 地域の人々と接することで、生活をよりよくする活動をしている存在に気付くことができる。 町の中で見られる人にやさしい工夫に気付き、なぜそのようになっているかについて考える。 あそびのたつ人あつまれ 誰もが楽しめるゲームを考えることで、他者理解の心を養う。	ひろがれわたしのものがたり 自己の成長を振り返り、支えられて生きてきたことを知り、感謝の気持ちを育む。
各教科	国語「みんなの前で話そう」 友達に自分の好きなことを伝える。 国語「うれしくなる言葉」 言葉による気持ちの伝わり方について知る。 音楽「うたでともだちのわをひろげよう」 歌を通して友達と仲良くする楽しさを知る。	国語「話し合ってきめよう」 話し合い活動を通して、友達との意見の違いを知り、認め合う力を育てる。 国語「心にくったことをつたえあおう」 友達との感じ方の違いに気付き、よさを認め合う力を育てる。	音楽「音を合わせて楽しもう」 友達との表現の違いを楽しむ。 算数「たし算とひき算」 習熟度別学習を取り入れ、クラスを超えて友達の意見や考え方の違いを認め合う。
	体育 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲良く運動したり、友達の考えを認めたりする。		
道徳科	つのがついたかいじゅう 自分の行動の善悪に気付き、友達とよりよい関係を築こうとする。 折り紙の名人 自分の得意なところやよいところを見付け、長所を大切にしようとする。 かえってきたホタル 身近な自然に親しみ、動植物について優しい心で接しようとする。	およげないりすさん みんなと仲良くするためにできることを考える。 どうしてうまいかないのかな 自分のよいところや苦手なことを知り、友達にも同じように得手不得手があることを知る。	日本のお米、せかいのお米 お米調べから、他の国で作られていたことや、伝えられていることについて知り、他国の文化に親しもうとする。 よかったよ 友達と仲良くするにはどんな気持ちが大切なのかを考え、友達と仲良くしようとする。
特別活動	学級活動 縦割り活動 学校行事 各活動を通して、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを克服したりしながら自己理解を深めるとともに、友達や他学年の人との関わりを通して、他者理解・相互理解を深める。		

表5 障害者理解教育 年間指導計画 第3学年

	1 学期	2 学期	3 学期
総合的な学習の時間	大好き！飛田給 自分達の生活をよりよくする活動をしている人に気付く。	大好き！飛田給 自分達の生活をよりよくする活動をしている存在に気付く。 自分の未来を創造して、話を傾聴することで自己認識や他者認識を深める。	私達の飛田給 自分達の地域にあるバリアフリーに気付く。多様な人達のために自分ができることを行う。
各教科	国語「たからものをしょうかいしよう」 友達と自分の宝物を紹介し合い、聞き合うことを通して、他者に興味をもつ。 社会「まちの様子」 学校の周りにある公共施設について知る。	国語「わすれられないおくりもの」 国語「モチモチの木」 物語を通して、心のつながりについて考える。	国語「おにたのぼうし」 物語を通して、心のつながりについて考える。 社会「受け継がれる行事」 地域の行事を受け継ぐ人々の思いに気付く。
	体育 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲よく運動したり、友達の考えを認めたりする。		
	外国語活動 言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする。		
道徳科	たった一言 自分の行動の善悪に気付き、友達とよりよい関係を築こうとする。 友だち屋 本当の友達とはどんな人かを考え、友達を大切にしていこうとする。 「わたしらしさ」をのばすために 自分のよさや特徴に気付き、長所を大切にしようとする。 とくジーのおまじない 自分の生活を支えてくれている存在に気付き、感謝の気持ちをもとうとする。	水やり係 自分の考えを相手に伝える大切さに気付き、相手の思いを理解しようとする。 日曜日の公園で 自分と違う意見も大切にするために、どのようなことを心掛けるとよいか考え、実践しようとする。	みんながくらしやすい町 相手の置かれている状況を見て、自らすすんで親切にしようとする。 ありがとうの気持ちを込めて 自分達の生活には支えてくれている人がいることに気付き、感謝の気持ちをもとうとする。
特別活動	学級活動 縦割り活動 学校行事 各活動を通して、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを克服したりしながら自己理解を深めるとともに、友達や他学年の人との関わりを通して、他者理解・相互理解を深める。		

表6 障害者理解教育 年間指導計画 第4学年

	1 学期	2 学期	3 学期
学習の総合的な時間	<u>長生きしてね</u> 高齢者について理解し、自分にできることを考える。	<u>障害ってなんだろう</u> 聴覚障害、視覚障害、肢体不自由について知り、体験活動や交流活動を通して、それらの理解を深める。	<u>みんな幸せ飛田給</u> ユニバーサルデザインの視点をもとに、これからの町づくりや自分達にできることについて考える。
各教科	<u>国語「メモの取り方を工夫して聞こう」</u> 話し手が伝えたいことの中心を捉え、自分の考えをもつ。 <u>社会「住みよいくらしをつくる」</u> 地域の人々の協力と工夫の在り方について理解を深め、地域の一員として自分にできることを考える。	<u>国語「1つの花」</u> 登場人物の生き方や考え方・行動などを自分と比べる。 <u>国語「新スポーツを考えよう」</u> 互いの意見の共通点や相違点に着目して話し合い、他者理解を深める。 <u>理科「わたしたちの体と運動」</u> 自分の体の曲がる部分を調べる活動を通して、自己理解を深める。	<u>国語「身の回りの便利なものを考えよう」</u> 道具や設備を通して、社会ではたくさんの人がそれぞれ違った立場で暮らしていることを理解し、「便利」について考える。 <u>社会「世界とつながる大田区」</u> 都民の一人として地域の外国人と共に生活していくために自分達ができることを考える。
	<u>外国語活動</u> 言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする。		
	<u>体育</u> 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲良く運動したり、友達の考えを認めたりする。		
道徳科	<u>世界に一つだけの花</u> 自分の長所を伸ばしていこうとする。 <u>思いやりって</u> 相手の気持ちを察し、行動しようとする。 <u>ひとりぼっちのYちゃん</u> 誰に対しても公平に接しようとする。 <u>学級会での出来事</u> 一人一人、考え方が違うことに気付き、それぞれの考えを大切にしようとする。	<u>ちょっと待ってよ</u> 誰に対しても分け隔てなく行動しようとする。 <u>見えない障害に気付くこと</u> 見た目には分かりにくくても困っている人がいることを知り、相手の立場や状況を想像して接しようとする。 <u>わたしの大切なもの</u> 自国と他国の文化の共通点や相違点を理解、尊重しようとする。 <u>より遠くへ</u> パラリンピックに出場した谷さんの生き方を通して、目標に向かって粘り強く取り組もうとする。	<u>みんなちがってみんないい</u> 自分らしさとは何か、それを生かすためにできることは何かを考える。
特別活動	<u>学級活動</u> <u>児童会活動（代表委員会）</u> <u>クラブ活動</u> <u>縦割り活動</u> <u>学校行事</u> 各活動を通して、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを克服したりしながら自己理解を深めるとともに、友達や他学年の人との関わりを通して、他者理解・相互理解を深める。		

表7 障害者理解教育 年間指導計画 第5学年

	1 学期	2 学期	3 学期
学習の時間 総合的な	共に生きる私達 知的障害について学習し、交流する方法を考え理解を深める。	パラスポーツ体験 パラスポーツ体験を通して、パラリンピックに興味をもち、障害について理解を深める。	共に生きる私達～パラスポーツを調べよう～ パラリンピックについて調べることで、様々な障害についての理解を深める。
各教科	社会「未来を支える食料生産」 米作りや水産業などの食料を生産する人々について知り、感謝の気持ちをもつ。	国語「大造じいさんとがん」 登場人物の生き方や考え方、行動などを自分と比べる。 国語「A I とのくらし」 ミニディベートを通して自分と友達の考え方の違いを発見し、他者理解を深める。 国語「世界遺産白神山地からの提言」 意見文を書く活動を通して、自分と友達との意見の違いに気付いたり、互いに認め合ったりする。 社会「未来をつくり出す工業生産」 企業の社会貢献や工業生産を支える人々の努力について理解を深めるとともに、感謝の気持ちをもつ。	社会「国土の自然と共に生きる」 自然環境を守るためには、様々な人との協力が不可欠だということを理解し、自己の生活の在り方について考える。
	体育 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲良く運動したり、友達の考えを認めたりする。		
	外国語活動 言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする。		
道徳科	すれちがい 広い心で相手の意見や立場を尊重していこうとする。 道案内 相手の立場に立って物事を捉えようとする。	「同じでちがう」 同じ命の重さをもつ人間として尊重し合い、それぞれの命を大切にしていこうとする。 「自分らしさ」を見つめよう 短所を改め長所を伸ばしていこうとする。 ブランコ乗りとピエロ 広い心で相手の思いや立場も尊重しようとする。 だれもが幸せになれる社会を 誰に対しても差別や偏見をもつことなく、公平・公正な態度で接し、正義の実現に努めようとする。 小さな国際親善大使 相互に尊重し合いながら、国際親善に努めようとする。	マークが伝えるもの 誰もが過ごしやすくするために工夫されているものについて知り、共生の意識を深める。 世界最強の車いすテニスプレイヤー 国枝慎吾 目標をもち、困難があってもくじけずに努力しようとする。
特別活動	学級活動 児童会活動 クラブ活動 縦割り活動 学校行事 各活動を通して、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを克服したりしながら自己理解を深めるとともに、友達や他学年の人との関わりを通して、他者理解・相互理解を深める。		

表8 障害者理解教育 年間指導計画 第6学年

	1学期	2学期	3学期
総合的な学習の時間	みんなのために避難所を開設しよう 誰もが利用しやすい避難所を開設するために必要なことを考える。	つながろう 世界と日本！ 日本と世界！ いろいろな国から来日する人達の思いに寄り添いながら、自国の良さや問題点を知り、文化や価値観に気づき、互いに認め合いつながり合おうとする。	ゆずりの心 de 未来へ Go! 自分の得意なこと、好きなことを振り返り、将来の自分のことについて考える活動を通して自己理解を深める。
各教科	社会「すべての人が幸せに生きるために」 基本的人権について知り、尊重しようとする意識をもつ。	国語「地域の防災について話し合おうーパネルディスカッションー」 意見の違いを大事にしなが話し合い、考えを深める。	社会「日本とつながりの深い国々」・「世界の人々と共に生きる」 国際理解を深めるとともに、他国の人々との関わり方や、共生社会の在り方についての理解を深める。
	体育 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲良く運動したり、友達の考えを認めたりする。		
	外国語 言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする。		
道徳科	世界人権宣言から学ぼう みんな、おかしいよ！ 共生の考えを大切にしようとする。	「クメール絨」の復興を目指して 五十五年目の恩返し 国際理解を深めるとともに、共生社会の担い手としての自覚をもつ。	エルトゥールル号ー友好の始まり 国際理解の考えを深めるとともに、共生社会の担い手としての責任感をもつ。 最後のおくり物 思いやりの気持ちをもちようとする。 ぼくの名前呼んで 共生の考えを大切にしようとする。 「ありがとう」の気持ちを伝える 感謝の気持ちを伝えることの大切さを知り、伝えようとする。
特別活動	学級活動 児童会活動 クラブ活動 縦割り活動 学校行事 各活動を通して、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを克服したりしながら自己理解を深めるとともに、友達や他学年の人との関わりを通して、他者理解・相互理解を深める。		

4 研究授業

(1) 研究の視点

① 「自己理解の深まり」について

- ・自分の成長を実感する。
- ・自分の考えの変化に気付く。
- ・自分の考えと友達の考えの相違に気付く。
- ・得意なことや自分のよさに気付く。
- ・不得意なことやできないことを認める。

② 「他者理解の深まり」について

- ・友達の意見を理解しようとする。
- ・友達の意見のよさに気付く。
- ・友達の意見を認める。
- ・相手の思いや考えに気付く。
- ・相手の状況を自分事として捉える。

(2) 指導の手だて

- ・自分の物の見方・考え方に目を向け、「変わった・広がった・深まった」という経験や過程を重ねていくための単元及び1単位時間の構成を工夫する。
- ・多様な人々との関わりの中で、相手を知り、活動や感情を共有するための場面設定を工夫する。

(3) 授業における具体的な工夫

- ・興味、関心や課題意識をもつことができるように単元構成をする。
- ・自分の考えを書いたり、発表したりする活動を取り入れる。
- ・ねらいを明らかにして、話し合い活動や協働学習を設定する。
- ・意見の違いを掘り下げような発問を工夫する。
- ・地域の人材を活用し、交流する機会をもつ。
- ・学習の積み重ねや自分の考えの変化が分かるような振り返りカードを工夫する。
- ・児童の意見を価値付けし、全体にフィードバックする。

(4) 研究授業の実際（令和元年度・2年度 研究1年目・2年目）

① 令和元年6月26日 第4学年 総合的な学習の時間「長生きしてね」

本時の目標：目的意識や相手意識を明確にし、調べたことを基に自分達が伝えたいことを考える。

② 令和元年10月17日 第2学年 生活科「あそびのたつ人あつまれ」

本時の目標：・相手や目的に応じて、伝えたいことを表現しようとしてすることができるようにする。

- ・多様な手段の中から、相手や目的に応じた伝え方を選んだり、活用したりできるようにする。
- ・遊びの約束やルールなどを考え、遊びをつくり出そうとすることができる。

③ 令和元年11月26日 第5学年 総合的な学習の時間「車いす利用者といっしょに楽しもう」

本時の目標：地域のために行われている活動や地域施設について、まとめたことや考えを共有し合い、自分達にできることを考える。

④ 令和2年10月21日 第6学年 総合的な学習の時間「つながろう 世界と日本！」

本時の目標：・世界には多様な文化や習慣があることや、来日するいろいろな国の人達の思いを理解している。

・集めた情報を、目的を明確にし、相手意識をもって整理・分析している。

⑤ 令和2年11月18日 第1学年 生活科「みんなのにこにこ大さくせん」

本時の目標：祖父母との交流を振り返り、気付いたことや分かったことを表現したり伝え合ったりすることで、自分の役割が増えたことに気付く。

⑥ 令和2年12月6日 第3学年 総合的な学習の時間「大好き！飛田給」

本時の目標：地域のために行われている活動や地域施設について、まとめたことや考えを共有し合い、自分達にできることを考える。

第2節 日常の取組

1 むるえんタイム（表9）

自己理解、他者理解、友達との関わりを深める活動を月に2回、朝学習の時間に全校で取り組んだ。始めに活動のめあてや約束を伝え、最後には振り返りを行う。

（1）ミニエクササイズ

構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニングを活用し、学年の初期、中期、学年末を考慮してゲームの内容を選択した。

（2）ぐるえん劇場

教員へアンケートを取り、友達への関わり方で改善させたいことをテーマにして、数分の動画を作成した。略案を作成し、全担任が動画を基に学級で話し合い活動を進めた。「こうすればよかったんじゃないかな。」等の気付きは、掲示板に貼り、児童にフィードバックした。

（3）図書の活用

参考図書を基にスライドを作って提示したり、それぞれの学習に合わせて障害理解に関わる本の読み聞かせを行ったりした。

（4）NHK Eテレ『u&i』の視聴

「感じ方の違い」「読み書きの苦手」「身体障害者への関わり」「外国人児童」などから、学級の実態に合わせてテーマを選んだ。

表9 るえんタイム活動計画

日付	題材名	ねらい	内容	参照
6/5	自己紹介ゲーム	友達の名前や好きなものを知ること、親近感をもつことができる。	グループを作り、テーマに対して1人ずつ発表し、2人目以降は前の人の発表も付け加えていく。	「構成的グループエンカウンターミニエクササイズ56選」(明治図書) p13,14
6/19	図書「友達関係(不安ダヨ星人・イライラ星人)」	不安や怒りの気持ちの特徴やそれらの気持ちの対処方法を知る。	スライドショーから、不安な気持ちや怒りの気持ちの特徴を確認し、対処方法を学ぶ。	「学校では教えてくれない大切なこと友達関係～自分と仲良く～」(旺文社)
7/3	質問じゃんけん	相手に伝えることの楽しさや自分を受け入れてもらう心地よさを実感する。	近くの人とじゃんけんをして勝った人が負けた人に一つ質問をする。	「小学校人間関係づくり～エクササイズ&ワークシート～」(学事出版) p40-45
7/17	るえん劇場①	相手の気持ちを考える。	遊びに誘われたときに何気なく「むり」と言って断る場面劇を見て、言われた相手の気持ちを考え、日々の自分の行いに照らして振り返る。	
8/4	うれしかった「ありがとう!」	友達がしてくれたことで嬉しかったことを「ありがとう!」カードに書き、相手にプレゼントすることで、感謝の気持ちを表す。	友達にしてもらって嬉しかったことをカードに書き相手に渡す。	「構成的グループエンカウンターミニエクササイズ56選」(明治図書) p128,129
8/28	4つの窓	自分と同じ好みや違う好みをもつ友達の存在を知り、互いの理解を深める。	4つのお題に対して自分に最も当てはまるものを選び、選んだ理由を添えてグループの友達と意見を交流する。	「小学校人間関係づくり～エクササイズ&ワークシート～」(学事出版) p112-116
9/4	図書「友達関係(自分大好き大作戦)」	自分自身の肯定的な受け取り方を知る。	スライドショーを見て、失敗したり、自分がかめだと思ったりしたときの受け取り方を学ぶ。	「学校では教えてくれない大切なこと友達関係～自分と仲良く～」(旺文社)
9/11	るえん劇場②	相手の様子によって話をやめたり、話す内容を考えたりできるようにする。	相手の反応を気にせずに自分の好きなものを見せ続けようとする場面劇から、相手の気持ちを考え、日々の自分の行いと照らして振り返る。	
10/2	ご注文はどっち?	自分を肯定するきっかけにする。	2つの選択肢からどちらかを選び、選んだ理由を添えてグループやクラス全体で意見を交流する。	「構成的グループエンカウンターミニエクササイズ56選」(明治図書) p56,57
10/9	るえん劇場③	友達に注意されたときは、一度自分の言動を振り返ることができるようにする。	注意されたときに自分の行動を顧みず、注意した相手に言い返す場面劇から、相手の気持ちを考え、日々の自分の行いと照らして振り返る。	
11/6	電池人間	他者と仲良くなかわり活動できるようにする。	お手玉を頭上に乗せて自由に動き回り、お手玉が落ちたら、近くの人に拾って頭上に乗せてもらう。	
11/20	u&i①	多様性を尊重し"みんな"で助け合える心情を育てる。	NHK for School「u&i」のサイトからクラスの実態に合わせて動画を選び視聴する。	NHK for School「u&i」
12/11	いいねコール	テーマに対しての自分の考えと友達の考えを比べ、友達のそれぞれの感じ方、考え方を聞き合う。	お題に対して自分の考えを発表したり、友達の考えを聞いたりする。発表を聞いて、どのような意見でも「いいね」とコールする。	
12/18	u&i②	多様性を尊重し"みんな"で助け合える心情を育てる。	NHK for School「u&i」のサイトからクラスの実態に合わせて動画を選び視聴する。	NHK for School「u&i」
1/15	WANTED=この人を探せ	あまり話をしたことがない友達のことを知り、お互いの親近感を深める。	お題に合う人の名前を書き、クラス全員で答え合わせをして、お題に当てはまる人を知る。	「構成的グループエンカウンターミニエクササイズ56選」(明治図書) p94,95
1/29	u&i③	多様性を尊重し"みんな"で助け合える心情を育てる。	NHK for School「u&i」のサイトからクラスの実態に合わせて動画を選び視聴する。	NHK for School「u&i」
2/12	でーきたできた	グループやクラスでできるようになったことを認め合い、互いの頑張りやよさを確かめる。	グループやクラス全体でできるようになったことを発表し、共有する。	「構成的グループエンカウンターミニエクササイズ56選」(明治図書) p108,109
2/26	図書読み聞かせ	多様性を尊重し"みんな"で助け合える心情を育てる。	図書は図書室の多様性のコーナーが友達関係の図書等から担任がクラスの実態に合わせて内容を選ぶ。	「学校では教えてくれない大切なこと友達関係～自分と仲良く～」(旺文社)
3/12	いいとこ探し	互いのよさを認め合う。	友達のいいところだと思う事実と感想をカードに書き、相手に渡す。	「構成的グループエンカウンターエクササイズ50選」(明治図書) p28,29

2 日常の取組

教師が児童理解に努めると共に、互いを認め合う学級経営を心掛ける。

- ・児童の活動に対して、結果だけでなく過程を認められるように児童の変容を見取り、価値付けたり、全体に広めたりする。
- ・否定的な叱り方をせず、本人に見通しがつくような声掛けをする。
- ・支援の必要な児童に対して、自分は受け入れられているという気持ちをもてるような関わり方をする。
- ・帰りの会などを利用して、よかったこと、友達のいい所探しなどをする。
- ・休み時間にはクラス遊びを取り入れ、友達と関わる楽しさを味わえるようにする。

3 学級経営

様々な子供が学びやすいように、ユニバーサルな学習環境を整える。

- (1) 教室前面は学習規律に必要な掲示物(教育目標、今週の目標、生活時程表、声の大きさ・話し方・聞き方)に揃え、棚は目張りをする。水槽などの注意を引きやすい物は置かないようにする。

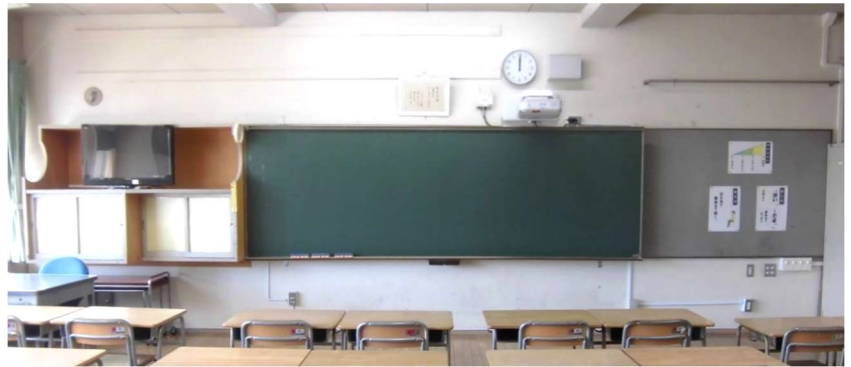


写真1 教室環境・黒板周り

- (2) 色の見え方に配慮し、黒板に書くチョークの文字の色は基本的に白と黄色にする。
- (3) 学習の方法(飛小スタンダード)を統一し、担任が変わっても、児童が混乱しないようにする。
- ① ノートの取り方(各教科共通)
- ・日付(ページ)を書く。 ・見開きで使う。 ・めあては鉛筆で囲む。
 - ・学習のめあて、まとめ、振り返りを書く。
 - ・まとめは赤鉛筆で囲む。
- ② 板書の仕方
- ・めあて まとめ 振り返りを分かるようにする。
 - ・めあては白線で囲む。
 - ・まとめは黄線で囲む。
- ③ 児童の机上
- ・その時間に使う物以外は、机の中にしまう。
 - ・教科書、ノートが見やすいように机上の使い方を習慣化する。

4 校内の特別支援部との連携

校務分掌の一つである特別支援部が中心となって全体会を開いている。配慮が必要な児童や児童への対応に対する情報共有、実践例の紹介を行っている。図5-1、図5-2は特別支援部で作成した教材であり、このような教材を研修などで教師が活用した。

(1) 児童の言動でイラっとすること、指導で困っていることについての対応の工夫

- ・「最悪」「やりたくない」嫌そうな顔・何度も机をたたくなどのマイナスの言動について
- ・素直に謝ることができない子供に対して
- ・友達とトラブルがあった際の状況を尋ねると、嘘を言っているようには見えないが、相手や周囲で見ていた児童の話と異なるとき
- ・何秒か前に説明したことと同じことを聞かれたとき
- ・自己肯定感が低い子に対して

図で示す「ビデオ巻き戻しタイム」

- ①出来事を図にする。
- ②お互いの気持ちを赤ペンで記入する。
- ③ケンカをふせぐにはどうしたらよかったかを青ペンで行動を修正する。

図5-1 特別支援部で作成した教材①

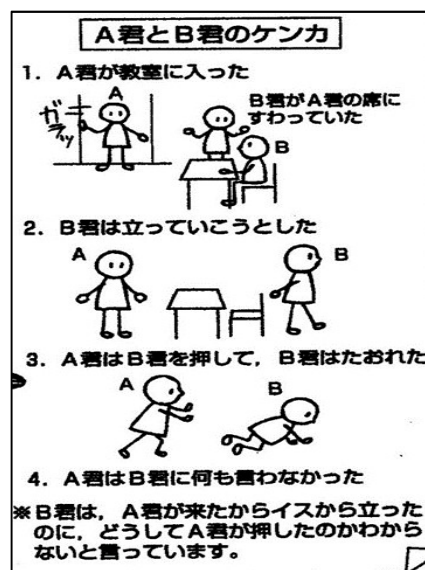


図5-2 特別支援部で作成した教材②

(2) 学級経営・授業の中での工夫

- ・みんなの前で寝る。
- ・小さな頑張りを見逃さないようにする。
- ・あったかい言葉をなるべく取り入れた言葉遣い+ジェスチャーもあわせて伝える。
「ありがとう」「助かる」「すごい」「ナイス」など
- ・自分の表情（笑顔）を豊かにすること。
- ・よい言動をクラス全体に伝えると、自分から言動を正す児童が増えた。
- ・注意するときに、あえて個人名を出さないようにする。
→自分の行動を振り返り、自分で何がいけなかったかに目がいき、自分で気付いてできるようになる児童が増えた。
- ・教室がざわついている際、しばらく黙っている。
→誰かが気付いて声を掛け合って静かになった。
- ・トラブルが起こった際は、互いの言い分をしっかりと聞き、互いに分からせるようにする。

(3) 具体的な指導方法の紹介

トラブルが起こったとき、お互いの気持ちを可視化し、望ましい行動を考えさせるための工夫について、特別支援部で作成した教材等を活用して示す。

第3節 体験・交流活動

1 パラスポーツ体験



講師：秋元 妙美さん
(元パラリンピックボッチャ日本代表選手)・調布市スポーツ専門委員の方々

写真2 ボッチャ（1，2年生）



講師：吉田 信一さん(元パラリンピック卓球日本代表選手)

写真3 パラ卓球（4年生）



講師：峰島 靖さん(日本車いすラグビー連盟)・羽賀 理之さん(リオパラリンピック日本代表)・乗松 隆由さん(WWRC 日本代表)

写真4 車いすラグビー（3～6年生）



写真5 車いすバスケット世界大会 3年生：歓迎セレモニー出席 5年生：日本代表強化試合観戦

6年生全員で、応援の旗を作成。

2 道徳授業地区公開講座



写真6 令和元年度

「バイオリンの演奏及び講話」
講師：川島 成道さん
(バイオリニスト)



写真8 令和3年度

「自分らしく生きる」
講師：石井 康二さん
(車いすソフトボール元日本代表キャプテン)



写真7 令和2年度

「パラリンピックのお話を聞こう」
講師：豊島 英さん
(車いすバスケットボール前日本代表キャプテン)

3 生活科・総合的な学習の時間の取組



写真9 「ふれあい交流会」(1年生)



写真10 「学校探検」(2年生)



写真11 「大好き！飛田給」(3年生)
講師：飛田給はやし連, 消防団, 郵便局の方々



写真12 「車いす体験」(4年生)
講師：高江洲 幸男さん(市内在住)



写真 13 「ダイアログ・イン・サイレンス」体験プログラム（4年生） 音のない世界を体験する
講師：ダイアログ・ジャパン・ソサエティ スタッフ 4名



写真 14 点字体験・手話体験（4年生） 講師：調布市社会福祉協議会の方々

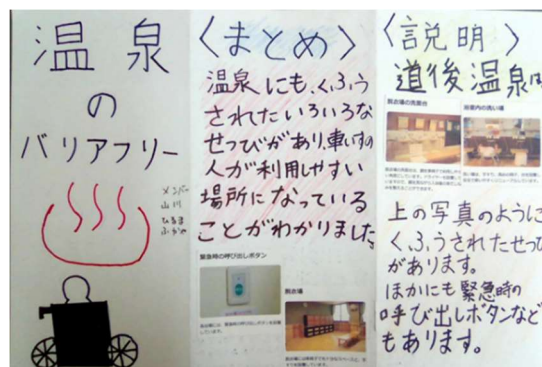


写真 15 「車いす利用者と一緒に楽しもう」（5年生）児童作成リーフレット



写真 16 「つながろう 世界と日本！」（6年生） 講師：留学生の方々

第3章 まとめ

第1節 児童の意識の変化

1 意識調査の分析（令和元年度・2年度 研究1年目・2年目）

研究1年目の6月に、児童の実態を知るとともに研究の方向性と手だてを定めるため、児童への意識調査を行った。図5-1から図5-6では、低・中・高学年ごとに集計した結果を比較した。

（1）令和元年度児童意識調査の分析と考察（令和元年6月実施）

設問1「いろいろな人と関わることは好きですか。」

図6-1から、全児童を平均すると83%の児童が「とても思う・思う」と答えている。人と関わることを好きと感じている児童が8割を超えているということは、本校の児童のよさであるといえる。今後も人と関わる楽しさを感じられるような活動を取り入れたり、人との関わりが円滑ではない児童には意識的に担任からの声掛けを工夫したりしたい。

設問2「困っている人がいたら助けようと思いますか。」

図6-2から、全児童を平均すると90%の児童が「とても思う・思う」と答えている。学年が上がるにつれて、その割合が高くなっているのは、日常の教育活動の成果と思われる。ただし、「とても思う」と答えた児童は低学年で60%に対して、中・高学年では38%であり、学年が上がるにつれて、思っただけでは行動に移すことができていない場合があるのではないかと推測される。自分で考えて行動できる力を育てていきたい。

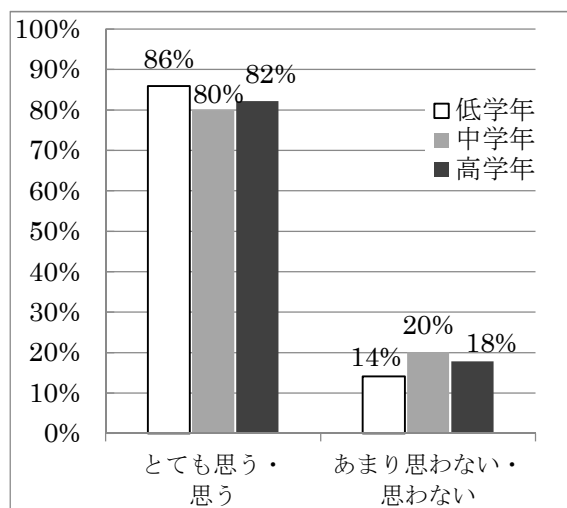


図6-1 いろいろな人と関わることは好きですか

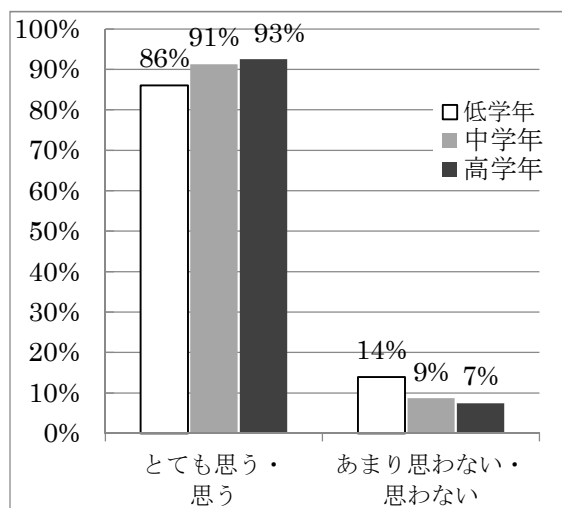


図6-2 困っている人がいたら助けようと思いますか

設問3「自分にはよいところがあると思いますか。」

図6-3から、全児童を平均すると69%の児童が「とても思う・思う」と答えている。その内訳は、低学年は7割を超えているが、中学年、高学年と上がるにつれて、低くなっている。自分のよさというのは人と比較することではなく、人それぞれであるという見方・考え方を育てたい。また、学年が上がるにつれて、学習や友達との関わりにおいて、できないことや失敗も増えていくと思わ

れるが、児童一人一人の見取りを通して頑張った過程を認めたり、できなかったことができるようになった実感をもてるような指導の工夫をしたりして、自己肯定感を高めていきたい。

設問4「人のことを考えて行動していますか。」

図6-4から、全児童を平均すると74%の児童が「とても思う・思う」と答えている。しかし、約3割の児童が「あまり思わない・思わない」と答えており、そう答えた児童は、結果としてトラブルにつながったり、失敗体験につながっていたりしているのではないかと考えられる。学習や生活のルールを明確にして、誰もが過ごしやすい学級づくりを行いたい。

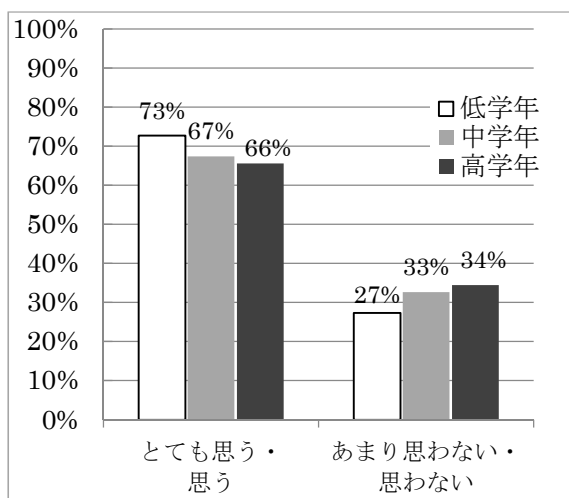


図6-3 自分にはよいところがあると思いますか

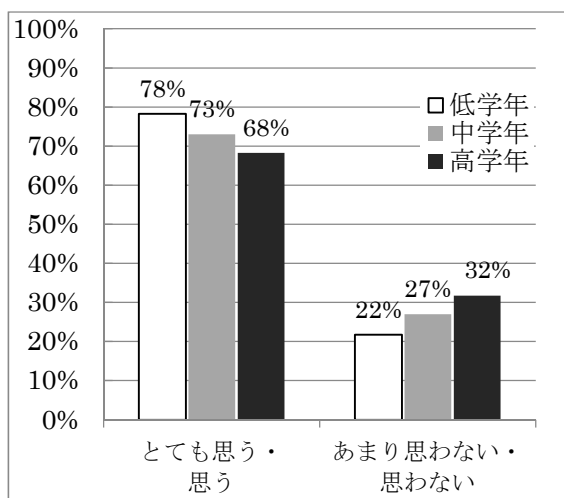


図6-4 人のことを考えて行動していますか

設問5「友達と考えが違った時、友達の意見も認めることができますか。」

図6-5から、中・高学年の児童を平均すると88%の児童が「とても思う・思う」と答えている。自分と友達の違いに気付き、友達のよさに目を向けさせる指導を一層充実させたい。また、設問3と関連して、自分が発表するより、人の発表を聞いている方が安心と感じていることの裏返しとも考えられるので、自分なりの考えをもたせるような指導の工夫もしていきたい。

設問6「障害のある人が困っていたら、声を掛けようと思いますか。」

図6-6から、中・高学年の児童を平均すると75%の児童が「とても思う・思う」と答えている。これまで、障害者に関わりのある様々な活動を取り入れてきた成果と思われる。声を掛けようと思う理由として、「困っている時はお互いさと思うから」と答えた児童が46%と最も多く「障害のある人との関わり方を知っているから」と答えた児童は8%であった。関わり方を知っている、知っていないに関わらず、他者へ思いを馳せることができることが大切だと考えられる。

一方、「あまり思わない、思わない」と答えた児童の理由として、「どのように声を掛けていいかわからないから」が61%と最も多かった。相手の様子を見ながら適切な関わり方ができるような指導が必要であると考え。一方、「知らない人だから」「自分とは関係ないから」と答えた児童が合わせて25%ということは、自分とは関係ない人には無関心であるということが分かる。自分達が暮らす社会には様々な人がいて、互いに尊重し、支え合うことが大切だという気持ちを育んでいきたい。

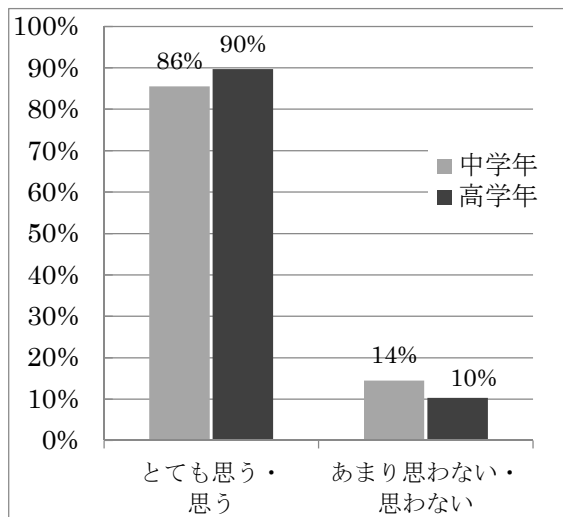


図 6－5 友達と考えが違った時、友達の意見も認めることができますか

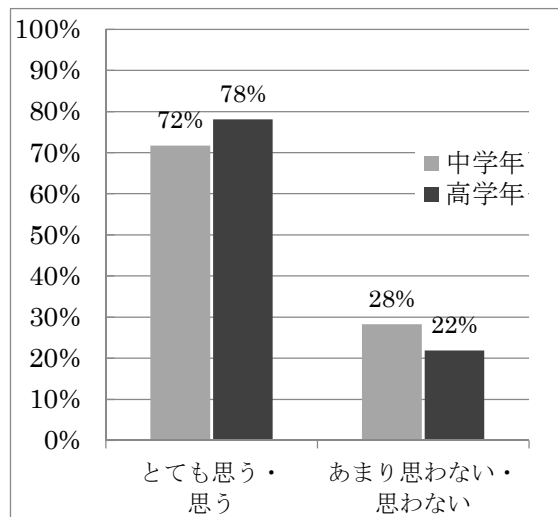


図 6－6 障害のある人が困っていたら、声を掛けようと思いますか

(2) 2年間の児童意識調査の分析と考察

研究2年間のまとめとして、全校児童の変容を見るための意識調査の結果は、図7－1から図7－6に示したとおりであり、以下のように分析と考察を行った。

設問1「いろいろな人と関わることは好きですか。」

様々な人と関わろうとすることは、多様性の尊重の基本と考える。図7－1のとおり、1年目の最初の調査と比べて、2年目の最後の調査では、「とても思う・思う」と答えた児童が2ポイント増えて85%となった。誰もが安心して過ごせる学級経営を心掛けてきたこと、自己理解、他者理解、友達との関わりを深める「ぐるえんタイム」を通年で行ったことなどの成果が表れたと考える。

設問2「困っている人がいたら助けようと思いますか。」

図7－2のとおり、大きな変容は数値では表れなかったが、9割近くの児童が「とても思う・思う」と答えた。未来を担う者として頼もしい結果であり、身近なところから実践できるように今後とも支援していきたい。

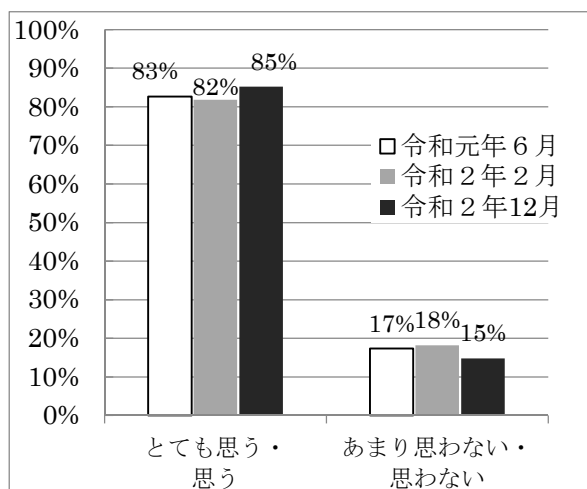


図 7－1 いろいろな人と関わることは好きですか

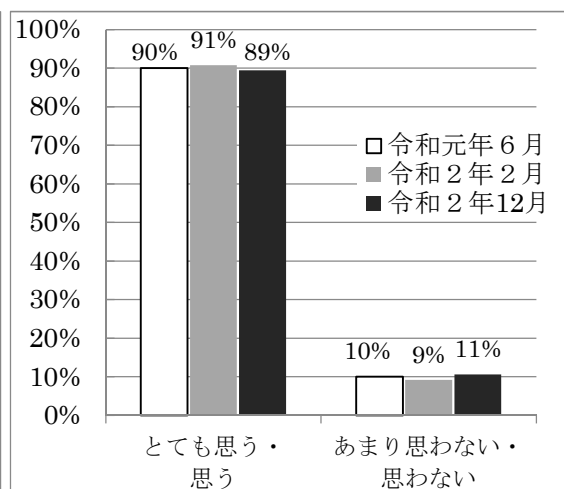


図 7－2 困っている人がいたら助けようと思いますか

設問3「自分にはよいところがあると思いますか。」

図7-3のとおり、1年目の最初の調査結果より、ポイントが下がる結果となったが、低学年ほど自己を肯定的に受け止める傾向があったことから、自分を客観的に見つめる目が育ってきたのではないかと捉えている。

理由記述を分析したところ、「とても思う・思う」と答えた児童で、多かった記述が「家の人や友達に褒められるから」「誰にも良い所があると思うから」「〇〇が得意だから」「がんばっているから」等であった。低学年から中学年にかけては、家族や友達など他者からの評価が大きく関係していることが分かった。また、設問4「人のことを考えて行動していますか。」に対しても高い評価をしていることから、友達や周りの人との良好な関わりも関係していると考えられる。

一方、「あまり思わない・思わない」と答えた児童の理由は「得意なことやできないことがないから」「ダメなところがあるから」「自分では分からないから」「怒られるから」等であった。高学年になるにつれ、学習や運動能力に対する周囲との比較を通して、自分を客観的に捉え、自己評価しているのではないかと考えられる。

また、自己肯定感の高い児童は自分のよい所もよくない所も合わせて受け止めていること、自己肯定感の高くない児童は自分のよくないところばかり気にしてしまい、自分を多面的に見ることができていないという傾向が分かった。

設問4「人のことを考えて行動していますか。」

図7-4のとおり、設問3と同様、1年目の最初の調査結果より、ポイントが下がる結果となった。このグラフには表れないが、内訳を学年別に見ると、高学年になるほどポイントが低いことが伺えた。このことについては、授業の最後の振り返りや活動の積み重ねにより、学年が上がるにつれ、児童が自分自身や周りの人に目を向けられるようになり、様々なことに気付いたり考えたりするようになってきたためであると考えられる。

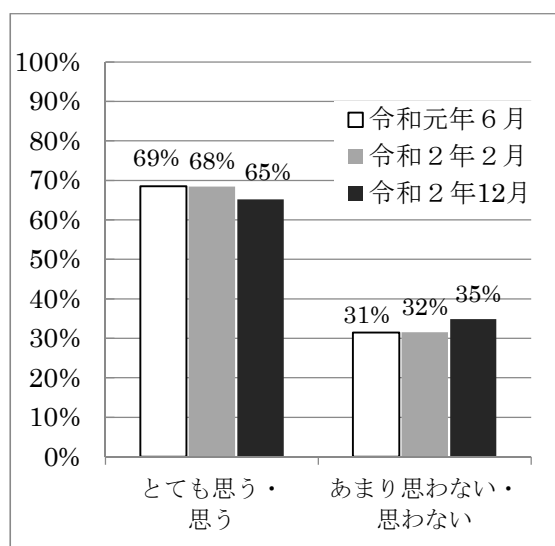


図7-3 自分にはよいところがあると思いますか

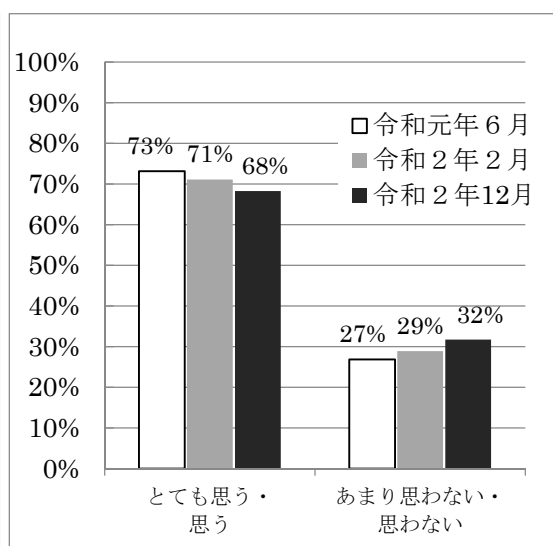


図7-4 人のことを考えて行動していますか

設問5「友達と考えが違った時、友達の意見も認めることができますか。」

図7-5のとおり、3回の調査結果では、ほぼ変わらない状況であった。全体では、9割近い児童が「とても思う・思う」と答えている。設問1の「人と関わることが好きな」児童が令和2年12月の調査では85%であることや、日常の学校生活の中で教師が児童の意見を価値付けして全体にフィードバックを心掛けてきたことが背景にあると考える。

設問6「障害のある人が困っていたら、声を掛けようと思いますか。」

図7-6のとおり、1年目の最初の調査結果より、5ポイント増加した。8割の児童が「とても思う・思う」と答えた。障害のある人との交流では、パラリンピアン、起業家、演奏家など様々な立場の人の講話を聞いたことや、生活科や総合的な学習の時間に交流活動や課題解決学習に取り組んできた成果と考える。

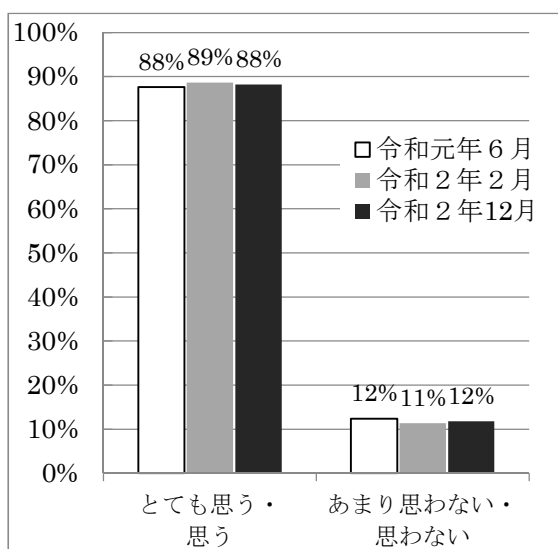


図7-5 友達と考えが違った時、友達の意見も認めることができますか

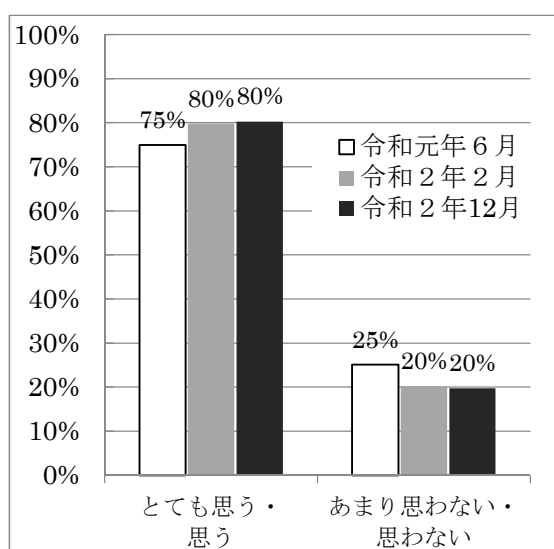


図7-6 障害のある人が困っていたら、声を掛けようと思いますか

2 記述回答の分析（令和元年度・2年度 研究1年目・2年目）

さらに、児童の発達段階に応じて、低学年（2年生）、中学年（4年生）、高学年（6年生）から1クラスずつ抽出して分析を行った。「障害のある人との交流（パラスポーツ体験や講話）から、どのようなことを思いましたか。」という設問について、児童が実際に書いた記述回答から、ポイントとなるキーワードを抜き出し、分類した。縦軸には「障害者理解の段階」（図1）に当てはめ、図8-1から図8-6のように、児童の理解が「気付く」から「考え、行動する」のどの段階にあるのかを表した。また、横軸には交流や体験をどれだけ他者との関わり視点で捉えているのかを表し、右にいくほど「自己中心」から「他者との関わり」さらに「社会への視点」へと進んでいくとした。また、円の大きさは、同じ記述だった児童を児童数に対しての割合で表している。

1回目（令和元年6月）と2回目（令和2年12月）を比べると、どの学年も半年間の学習を通して、障害者理解の段階も、他者との関わり視点も進んでいることが分かった。また、学年発達の観点から比較すると、学年が上がるにつれて、同様に段階が上がっていることが分かった。

(1) 2年1組の記述から

6月に比べ、変容の1番大きかった学年である。地域に住む特別支援学校に通う児童と学期に1回ずつ共に学習する副籍交流活動があったことで、様々な立場の人をより身近に感じることができたと思われる。また、2年生の後期ということでも、自分の思いを言葉で表す言語能力も急速に高くなっていく時期だということも一因であると考えられる。

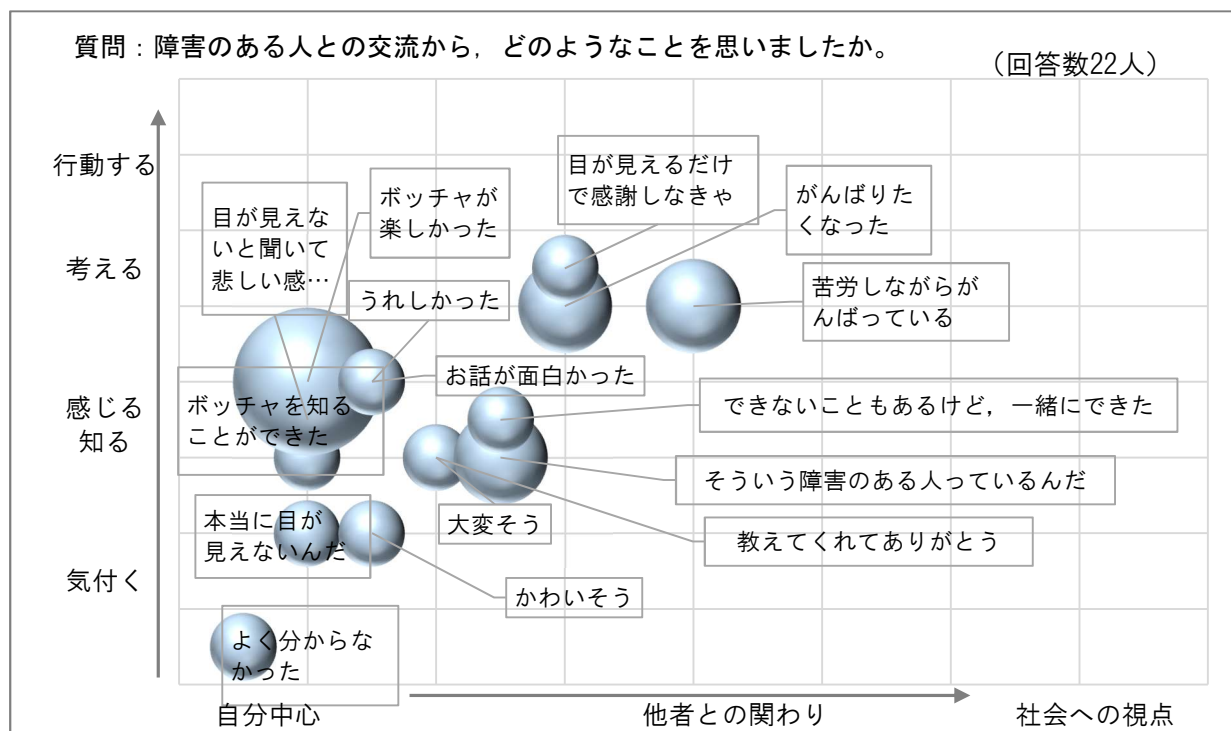


図8-1 令和元年6月実施

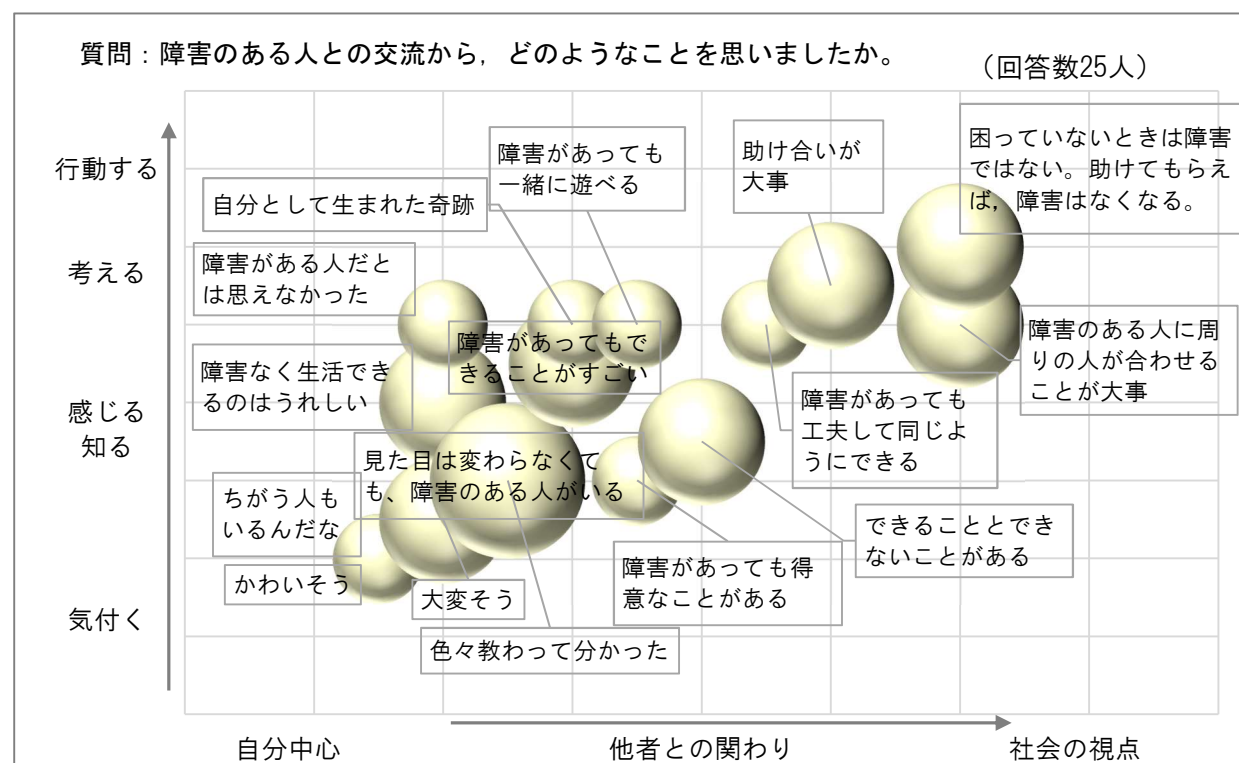
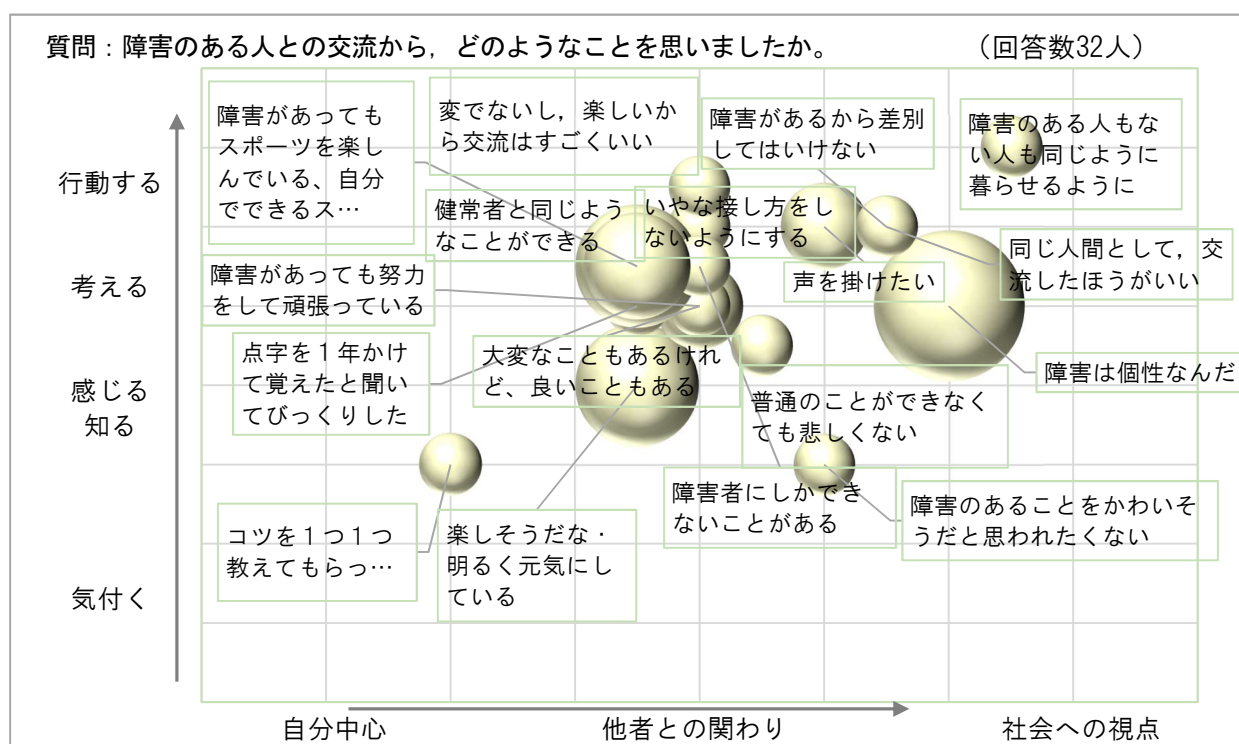
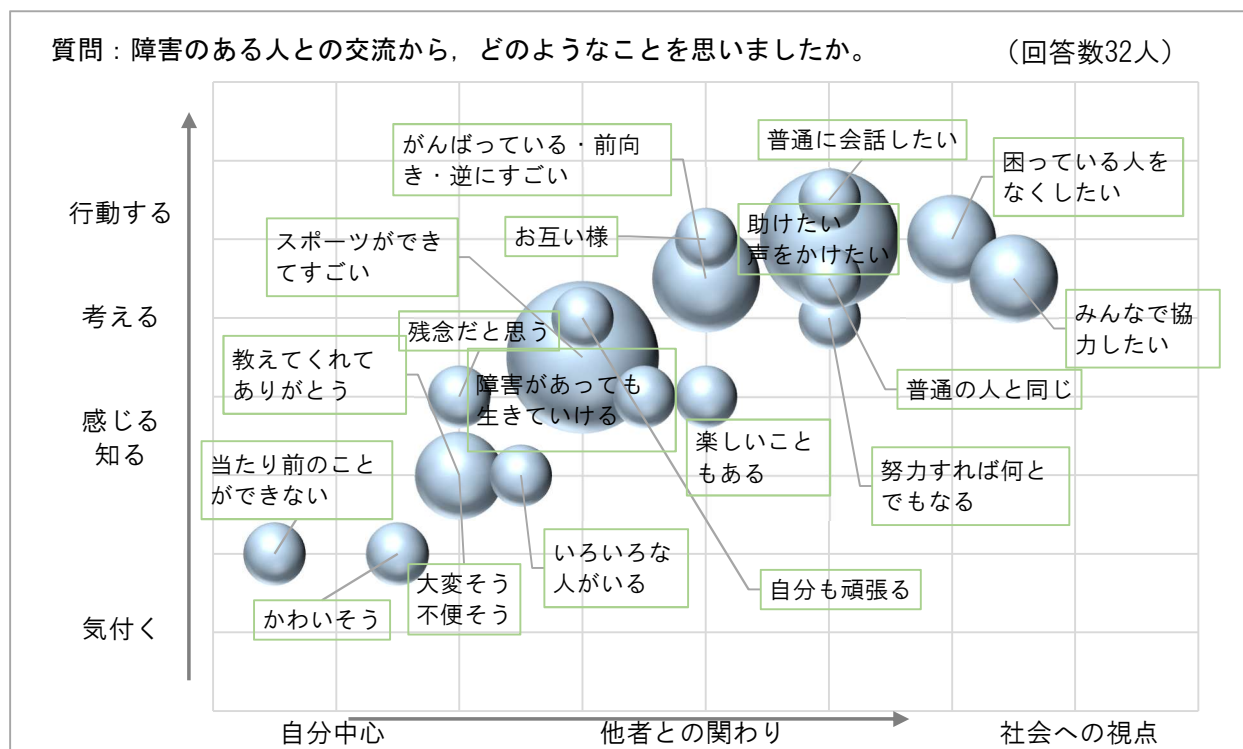


図8-2 令和元年12月実施

(2) 4年2組の記述から

6月は「障害者理解」にも「他者との関わり」についても、様々な段階の記述があったが、年間を通して「福祉」の学習に取り組んだことで、12月は自己中心的な意見はほとんど見られなくなった。また、車いす体験や点字体験、調べ学習を行うことで、障害のある方の対場に立った感想が多く見られるようになった。



(3) 6年2組の記述から

6年生はこれまでの積み重ねがあることから、「障害者理解」も「他者との関わり」も、より高い段階の記述が多く見られた。「助け合ってもっとよい社会に」「差別のない世界にしたい」と、他者との関わりがより社会に向かっていく記述も見られるようになった。

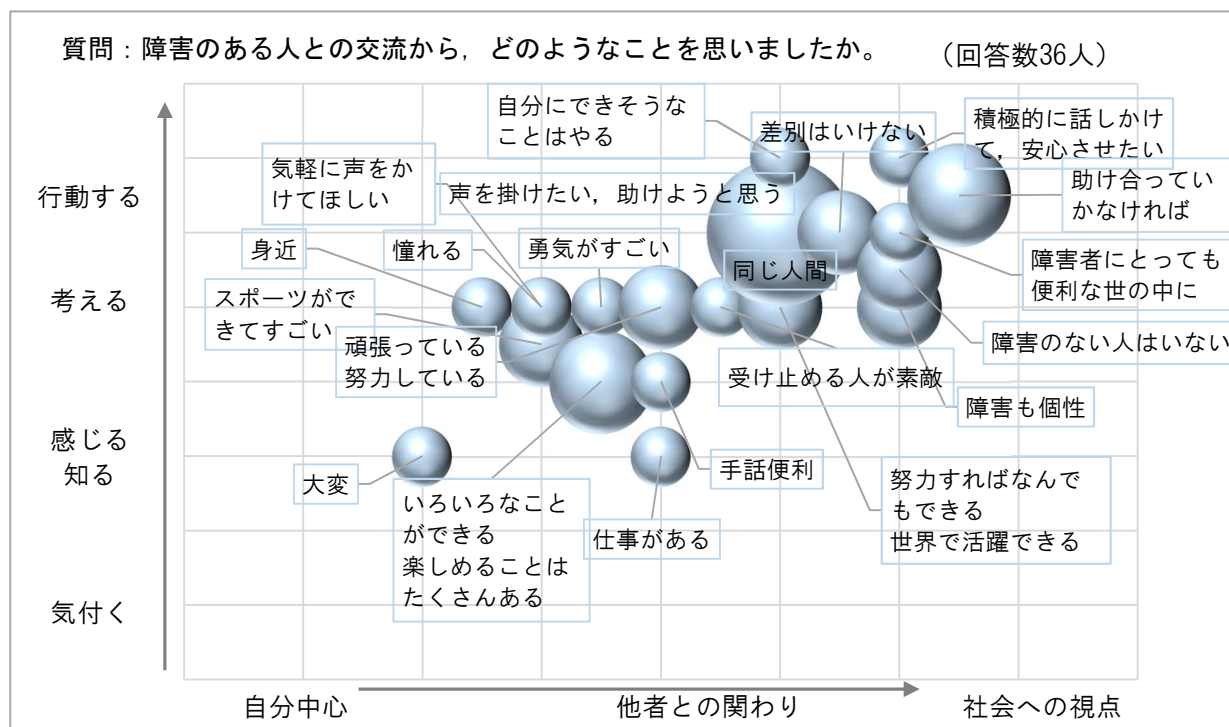


図8-5 令和元年6月実施

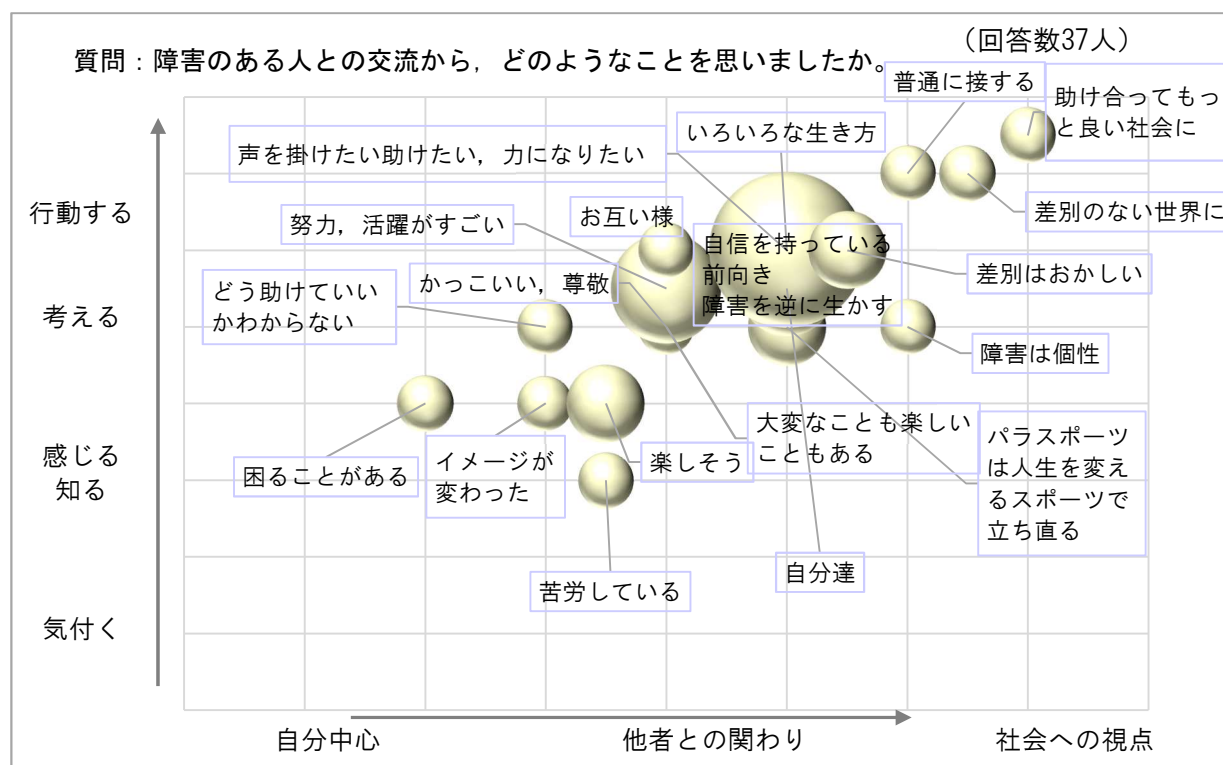


図8-6 令和元年12月実施

3 日常の言動からの気付き

教師が児童の変容を見取るため、日常の言動について記録に残していった。学校生活で周りの人を思いやる言動が見られただけでなく、学校外でも、多様な立場の人が困っていることに気付き、自分にできることを考えて行動に移していることが分かった。

(1) 学校生活

- ・道徳で「同じ地球で同じ空気を吸って生きているから、みんな平等で、みんな大切な存在」と発言していた。
- ・ずっと忘れ物をしていた児童がその日はすべて持ってきたことが分かり、クラスのみんなから拍手が起こった。
- ・町探検のインタビューで、障害がある方が利用しやすい工夫について質問していた。
- ・授業中、みんなが待っているのに気付かずマイペースの子に、優しく声を掛けていた。
- ・いつもけんかをしてしまう児童の「がんばりカード」をたまたま見かけてしまった児童が「がんばっているんだね、えらいな。」と言って理解を示していた。
- ・「おれ、いいところないし」とつぶやいていた児童に、「〇〇さん、優しいじゃん」と周りの児童が声を上げていた。
- ・通級教室のグループ学習で、相談して決める活動の時、友達の意見をきっぱりと否定するのではなく、優しく「うーん…」と言って反応していた。

(2) 日常生活から

- ・公園で遊んでいた時、通りがかりのおじいさんが杖を落としたのを見かけ、拾って渡した。
- ・道路の点字ブロックの上に置かれていた自転車をどかしておいた。
- ・白杖を持った人が困った様子だったから、「お困りですか」と声を掛けた。郵便局に行きたいと言っていたので、郵便局に連れて行った。
- ・横断歩道の前で、白杖をもっている人に勇気を出して「大丈夫ですか」と声を掛けた。

4 東京都オリンピック・パラリンピック教育アンケート調査（令和3年度 研究3年目）

東京2020オリンピック・パラリンピック大会後に、東京都教育委員会が都内の小・中学校に対して実施したアンケートにも、本校のこれまでの取組の成果が表れており、本校の研究と関連のある項目3点について分析を行った。

(1) 調査概要

- ① 調査時期 令和3年8月～令和3年9月
- ② 調査方法 質問紙法。最も否定的な回答を1、最も肯定的な回答を4として数値化し、全回答の平均値を算出した。（否定的な回答と肯定的な回答が同数の場合、「2.5」となる。）
- ③ 調査対象及び対象校
 - ア 東京都オリンピック・パラリンピック教育アワード校の小学校第4年以上の児童、生徒（本校もアワード校である。）
 - イ 都内公立学校から抽出した学校の小学校第4学年以上の児童、生徒

(2) アンケート結果

① 自己肯定感について

図9-1は、「自分自身」についての質問の結果である。本校の児童は、毎年度実施されている東京都のアンケート調査では、自己肯定感の低さが課題になっており、本研究でも、研究仮設において、「自分を肯定する力」は「人を認めていく力」につながると捉え、研究をすすめてきた。

このアンケートの「自分にはよいところがあると思うか」と「自分自身を大切な存在と思うか」の質問でも、他校に比較して低いポイントとなっている。しかし、「自分は根気強い方だと思うか」と「失敗をおそれないで挑戦しているか」の質問では、他校に比較して高いポイントとなっている。まだ、自己肯定感の高まりが十分ではない状況があるものの、計画的に意図した日常の取組や、高齢者や障害者との交流活動やパラスポーツの体験等から、多くのことを学んだ様子が見えてくる。

特に、パラスポーツの体験や障害のある方からの講話の際には、積極的に質問し、素直に感動したことを感想文等で述べる児童が多く、このような経験を自己肯定感に結びつけていきたい。

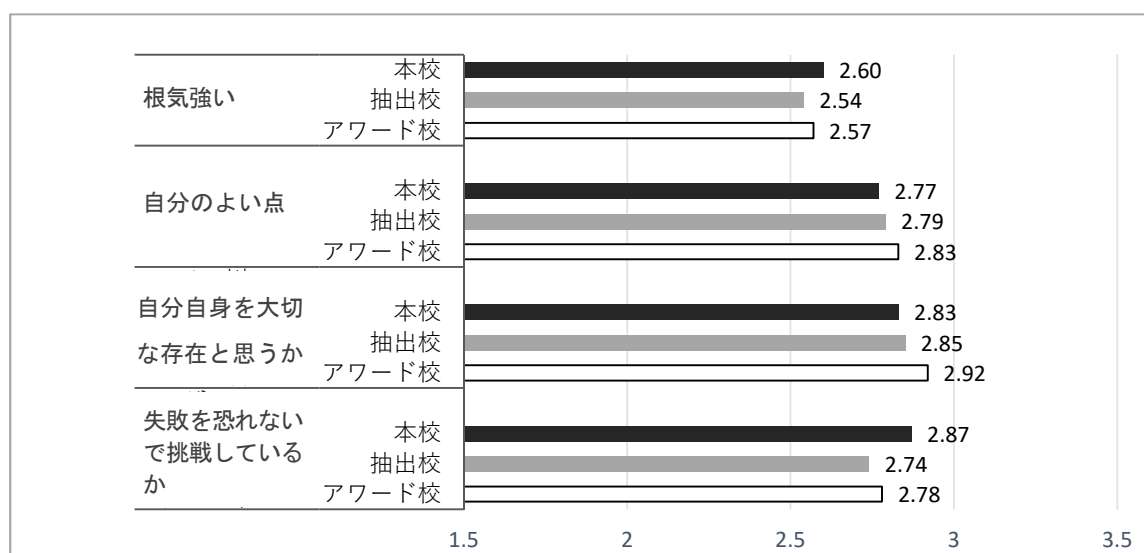


図9-1 自分自身について

② 他者理解について

図9-2は、「ボランティアマインド」についての質問の結果である。実際にボランティア活動に参加した経験は、他校に比べて少ないが、「人のために役立つことをしたいか」と「ボランティア活動に参加したいと思うか」では、他校に比較して高いポイントとなっている。

研究1年目（令和元年度）・2年目（令和2年度）に実施した本校の児童意識調査では、「困っている人がいたら助けようと思いますか」（p26）に質問では、「思う」の割合が2年間の中で次第に増えていき、令和2年12月の2回目の調査では89%の児童が肯定的な回答をしていた。「障害のある人が困っていたら声を掛けようと思いますか」（p28）の質問でも同様であり、2回目の調査では80%の児童が肯定的な回答をしていた。

自己理解を進めるとともに、関心は他者へとひろがっていく。自分とは異なる環境や立場の人に気付き、人のために何かしたいと思うボランティアマインドから、進んで困っている人を助ける行動ができる児童を育成したい。小学生にとって具体的な行動に移すことはなかなか難しいことではあるが、気持ちが育っていることが、アンケート結果からもわかる。

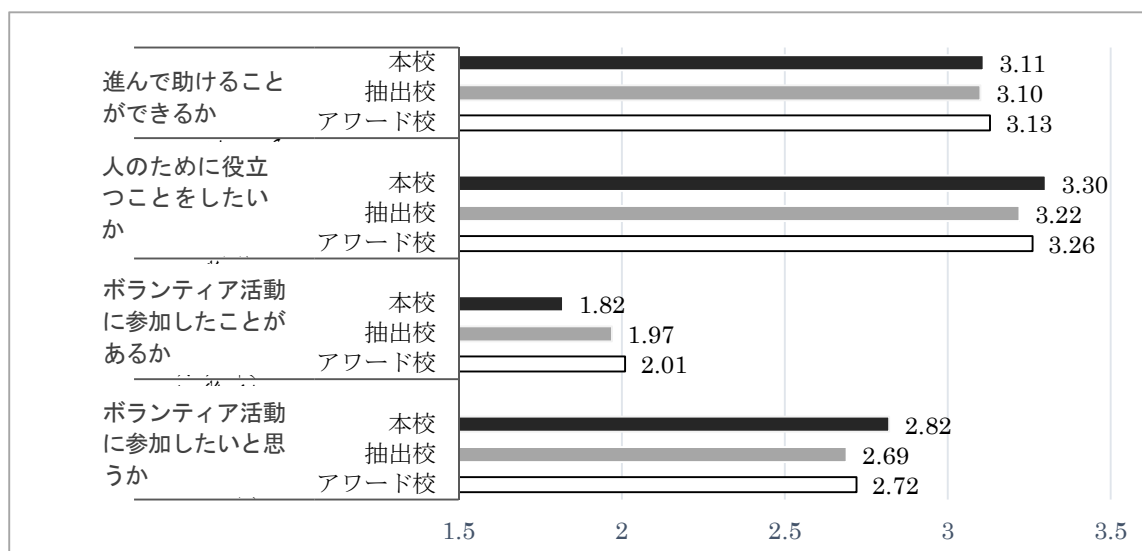


図9-2 ボランティアマインド

③ 高齢者や障害者との交流活動やパラスポーツの観戦・体験について

図9-3は、「高齢者・障害者理解」についての質問の結果である。本校では、交流や体験等の経験については、実際に活動を行ってきたので、他のアワード校と比較してもかなり、高いポイントとなっている。特に、「～したいか」という質問についても高いポイントとなっており、これまでの活動が、高齢者や障害者との交流に対する興味・関心を維持していくことにつながるとと思われる。

研究1年目（令和元年度）・2年目（令和2年度）に実施した本校の児童意識調査の質問「障害のある人との交流からどのようなことを思ったか。」についての記述の分析（p29～31）では、半年間の間でも、どの学年も「障害者理解の段階」と「他者との関わりの視点」が進んでおり、また、学年が上がるにつれてその段階も上がっていることが分かった。このアンケートでも同様の結果が得られ、各学級や学年が単発で交流や体験を行うのではなく、学校の全体計画として教育課程に位置付け、計画的・継続的に実施していくことの重要性が表れた。

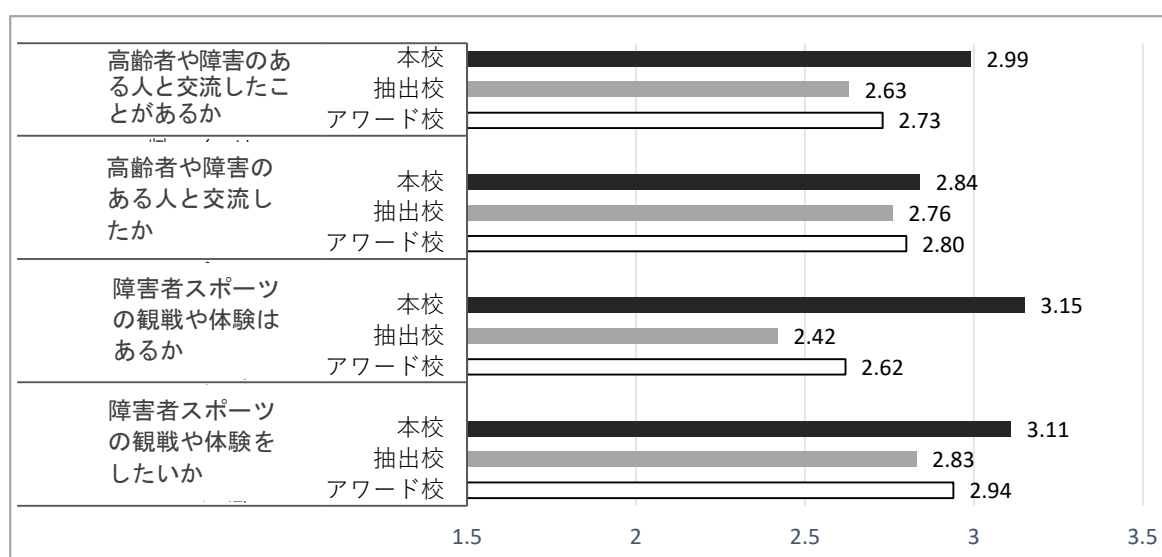


図9-3 高齢者・障害者理解

第2節 教師の意識の変化

令和元年度に研究をスタートした時点では、オリンピック・パラリンピック教育アワード校やパラスポーツ競技応援校として、パラスポーツ体験や車いすバスケットボールの応援、また、障害のある人を講師に招いた道徳授業地区公開講座等の活動は実施していたが、特別な研究としては取り組んでおらず、手探りの状態であった。そこで自分達が「障害者理解教育」について感じていること、疑問に思っていることを出し合うことから始め、研究の方向性を探った。2年間の研究の中で、パラスポーツや交流活動を積み重ねるごとに、児童の周りの人への意識や行動が変わっていくのを見取ることができるようになった。また、教師自身も障害のある方や多様な立場の方へ自然と関わることができるようになっていった。

1 研究スタート時の教師のアンケート（令和元年5月実施）

- ・何をもって障害者というのか……。捉え方や環境の問題も大きい。
- ・そもそも障害を理解するということはどういうことか。
- ・なぜ障害者理解が必要なのかを子供たちがどう捉えているか。
- ・児童に分かりやすく伝えるにはどのように話したらよいか。
- ・小学校での障害者理解について。発達段階に応じた具体的な深め方は。
- ・障害者の理解の仕方を「こうあるべき」と押しつけることはできないと思う。どんなふうに理解し、どんな態度を取っていくのか考えるのは児童であり、そのための体験や少数派の存在を知る学習などを行っていくのが、学校や教員の役割ではないかと思う。
- ・子供たちの発達段階によって理解に差が生じること、また障害の方々との直接的な交流などの経験によっても異なってくると考える。偏見や差別をなくし、お互いを認め合えるためには、まず、自分の心の中にある偏見・差別的な気持ちや考えを認め、自分の心にあるものと向き合っていく必要があると考える。（例えば「怖い、近寄れない、気持ち悪いなどなど」）その思いを出さなければ真の理解にはつながっていかないのではないかと考える。その部分を指導の中でどのように取り上げていくかは大変難しい……。
- ・障害者理解のために子供に指導しているが、実生活で出会う障害者のイメージが子供の中で強いため、単発の指導では難しいと感じている。
- ・障害者理解はCMなどの影響や体験する機会が増えたことで、社会的に意識がされるようになってきているが、大人も子供も障害者以前に他者への意識が薄いと感じる。電車に乗ってきたお年寄り、妊婦さんに気付かずに携帯ゲームや居眠り。他者へのアンテナを張っていくことが他者理解につながり、それが外国籍の人や障害のある人、高齢者への意識につながると思う。身近な人（隣の子）→少し周りの子（班の子）→クラスの子→学年の子→年下、年上の子→ → →というような広がりが大切だと思う。
- ・他者理解をするために自己理解が必要であると思うが、それをどのように結び付けていくか。
- ・みんなと同じようになかなかできない人からすると、理解が得られないのはとてもつらい。いろいろ説明しなければいけないこともしんどい。説明したら分かってもらえるとも限らない。これがずっと続いていく。理解される環境、当たり前レベルが上がっていくことを望む。
- ・指導者として本人の実態把握が大切で、少しの工夫次第で変えられることもあると感じている。軽度の障害のある子供たちはたくさんいると思う。周りの人がさりげない配慮ができる

ようになればと思う。

- ・障害のある人との接点がある子とない子で、理解に差があると思う。毎年、様々なゲストティーチャーが来てくださってありがたい。差別はしてはいけない、助けてあげたいという優しい気持ちは子供たちがもっているとを感じる。ただ、自分にできることは何かと一歩進んだところまでは難しい。
- ・障害者が他の人と平等に暮らすためにどのような合理的配慮が必要なのか。対応の仕方等を教えていただきたい。
- ・子供たちの中にも特別支援が必要な児童が多い中、いわゆる目に見えない障害である発達障害等について触れるべきか。触れるとしたらどのように触れればよいのか。
- ・健常者が障害者に対して、「助けてあげなきゃ」というような社会的弱者として見てしまうことがある。（対等でない。どこの部分で対等であるか。）上から目線になっていないか。
- ・障害者理解とボランティアマインドがあやふやになる。他人への思いやりは相手が健常者でも必要だと感じるが、相手が障害者だった場合、どのような行動が適切なのか迷いが残る。弱者に対するように思いやるのは心のバリアフリーとは言えないだろうし、具体的にどのようにするのがいいのか。
- ・障害のある方に、どう関わったらいいか、よく分からないところがある。手助けをしていいか、声を掛けてみるだけでいいのか・・・。「障害者理解」なので、こういうところが困りやすいとか、手助けが必要等を知ることではなく、最終的に「様々なハンディがあっても、皆安心して共生できる社会を考える」という大目的に目を向けていくということでのいいのか。
- ・発達障害は見た目もわからない上に、コミュニケーションの取りづらさもあり、困っていることを分かってもらうのも難しいと感じている人が多い。
- ・自閉症など、外見で分かりにくい障害について。突然の行動にびっくりすることがある。
- ・昨年度お話をしていただいた方々には、障害を乗り越え成功したエピソードが多く、聞いていて興味深く、楽しかったが、その他の方々についてはどう指導し、理解していけばよいのか。
- ・障害はあるが、ある分野で成功した人を含め、障害があることで苦勞したこと、嫌な思いをしたこと等の負の内容の話も子供たちにもっとしてもらった方がよいのか・・・障害のある方にどこまで突っ込んで話を聞いてよいのか、どのようなスタンスで接したら良いのか。
- ・昨年度の「ボッチャ」の方の本音で、「体調に不安があり、パラリンピックにも出られるかどうかその瞬間まで分からない。心の状態によっても体調が大きく崩れることがある。」という言葉に驚いた。
- ・視覚障害者のための点字ブロックが肢体不自由者にとって、障害になることなど難しい。
- ・近所の全盲の方は本当に耳がよく、私が疲れている時は必ず「疲れているねえ」と必ず健康茶を飲ませてくれる。相手の声で気持ちや疲れている様子を見抜けてしまうのはすばらしい。

2 選択肢による意識調査（令和元年度・2年度 研究1年目・2年目）

（1）障害者理解に対する教師の意識

図10-1、図10-2のとおり、設問1、2から、障害者理解に対する教師の意識は高いと考える。「障害のある人が困っていた時の声掛けや手伝い」の設問が「よくある」が下がり、「ない」が上がったのは、コロナ禍の影響で人と接することの制限があった影響かと思われる。

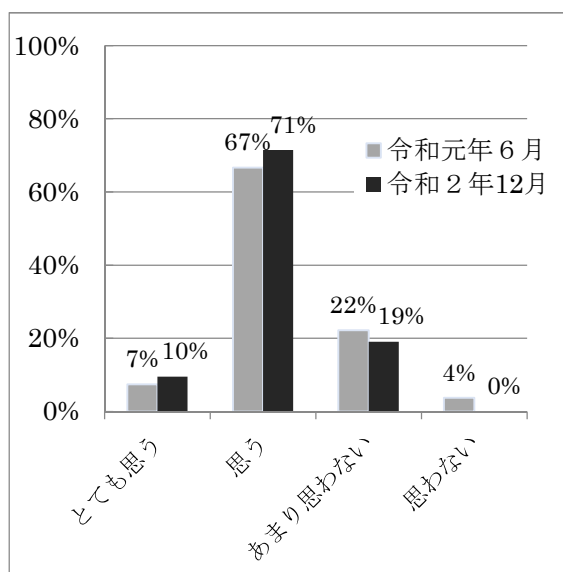


図 10－1 【設問1】学校以外で、障害のある人が困っていた時に声を掛けたり、手伝ったりしたことがありますか。

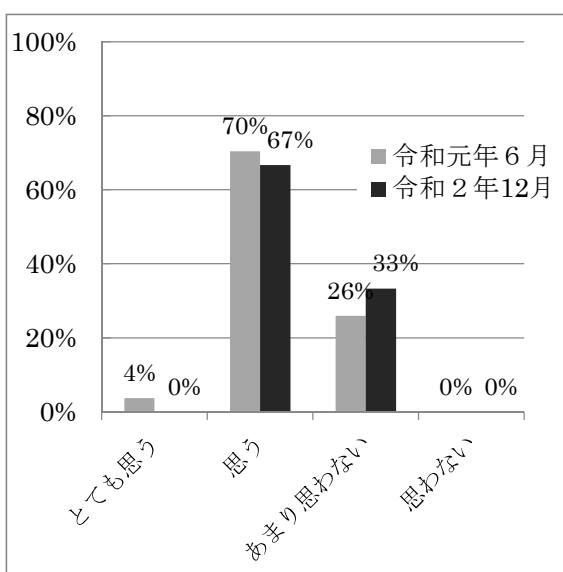


図 10－2 【設問2】障害のある人は、社会で差別を受けていると思いますか。

(2) 障害者理解教育に対する教師の意識

図 10－3 のとおり、設問 3 「障害者理解の教育は難しいと思いますか」に対して、「思わない」の回答は2回とも0であった。「あまり思わない」の回答も、1回目の調査に比べ、2回目の調査では8ポイント上がった。しかし、「とても思う・思う」の回答は、1回目よりポイントが89%から81%に下がったものの、2回目の調査が終わった時点では、約8割の教員が障害者理解教育は難しいと感じている状況がある。2年間の研究に取り組んだことにより、障害者理解教育の成果が上げられたことを教師一人一人の今後の実践に役立てたい。図 10－4 のとおり、「障害者理解の取組は、多様性を尊重する児童の育成につながっていると思いますか」の設問に対しては、「とても思う」が1回目の調査に比べ、2回目の調査では、7ポイント高くなった。

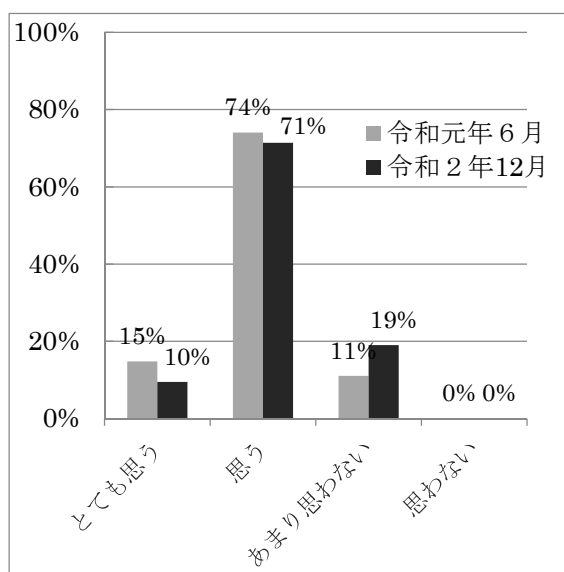


図 10－3 【設問3】障害理解の教育は、指導が難しいと思いますか

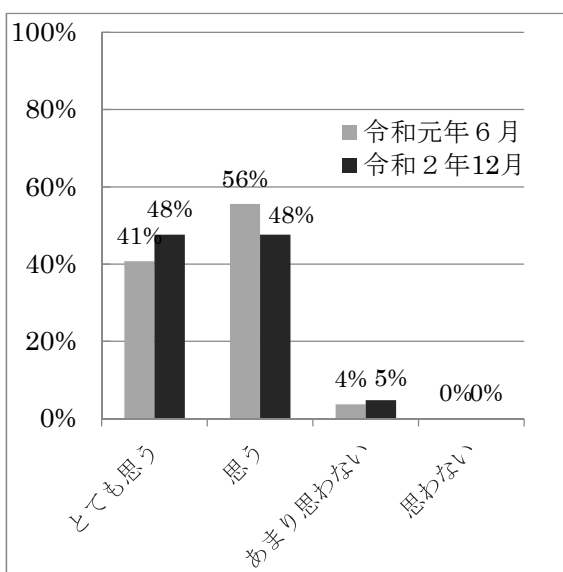


図 10－4 【設問4】障害者理解の取組は、多様性を尊重する児童の育成につながっていると思いますか

3 日常の活動における変容

- ・学級活動で、「相手を思う気持ち」を育むために、「ありがとう」を教員も一緒にたくさん言うように心掛けた。
- ・一日のよかったことを毎日発表したり、友達のよいところを発表し合う機会を工夫したりするようになった。
- ・いろいろな機会を通して、「みんな一人一人違うんだね」と、個性の尊重につながる声掛けをしてきた。
- ・車いす利用者の方が自動販売機で飲み物を買おうとしていたのを見かけたとき、児童の「勇気を出して声を掛けた」の言葉を思い出し、「ボタンを押しませんか」と、自然に声を掛けることができた。

第3節 成果と課題

1 成果

(1) 児童の変容

- ・障害者理解教育への取組を数値的に評価することは難しかったが、児童意識調査を複数回実施することによりその割合を比較したり、記述式の記事をバブルチャートを利用して分析したりすることにより、児童の成長が客観的に理解できた。
- ・様々な立場の方との交流や体験を重ねることにより、児童に障害のある人への偏見や戸惑いが少なくなり、休憩時間には出会いを楽しんだり、自分から積極的に話し掛けたりするなど、交流することを楽しむようになった。
- ・朝学習の時間（ぐるえんタイム）に、年間計画に基づいて自己理解・他者理解・友達関係作りに関わる活動に取り組むことで、困っている人を助けたり、自分ができることを考えられたりする姿が多く見られた。

(2) 教師の変容

- ・令和3年度（研究3年目）に東京都の東京都オリンピック・パラリンピック教育アンケート調査があったことで、本校の取組の成果を他校と比較して客観視することができ、学校全体で計画的・継続的に障害者理解教育に取り組むことの必要性を感じた。
- ・障害者理解に関わる学校全体計画を立て、発達段階に応じた指導を行うことで、自分自身を含め、多様性を尊重する学習を積み重ねていくことができた。その結果、児童にもっとこうしたい、こうしなくてはという向上心の高まりが見られた。
- ・他教科との関連を図りながら指導を行うことで、自分自身や多様性の尊重に対する児童の見方や考え方が広がり、理解が深まっていくのを振り返りカードや発言から見取ることができた。

(3) 東京都オリンピック・パラリンピック教育のレガシーとして

- ・コロナ禍であり、東京オリンピック・パラリンピックを会場に行って直接観戦することは叶わなかったが、ホスト地域として準備し、学校としても意識を高めてきた。本研究でその成果が明らかになり、確実にレガシーとして児童の中に残っていくと思われる。
- ・誰にでも得意なこと、不得意なことがあり、一人一人が違って当たり前なんだと児童に働き掛

け、互いの人格を尊重し合うような人間関係を築いていく学級経営や専科経営が学校全体に浸透した。

- ・障害者理解は一朝一夕に育つものではなく、学校の教育活動全般において時間を掛けて育てていくものである。障害者理解を基盤として、自分とは異なる存在と感じられる人々、多様な人々に思いを馳せ、様々な人を尊重し、共存していく人に成長してほしい。

2 課題

- ・自己理解を深めるには、児童の頑張った過程を認めることやそれぞれの児童の困難さに応じた指導をさらに丁寧にしていくことが大切である。学校での取組を家庭にも周知し、学校と家庭とが双方に連携をして取り組んでいくことも必要である。
- ・互いを認め合っていくためには、低学年の頃から国語における言語化、道徳における心情理解の積み重ねが大切である。また、生活科や総合的な学習の時間の障害者理解に関わる単元作りもさらに工夫していきたい。
- ・障害者理解に関わる学習や活動で学んだこと、考えたことを日常の生活で生かしていけるように、児童への声掛けや実践したことへの価値付け、今後の継続した指導が必要である。
- ・パラスポーツの体験や障害のある方の講話など、予算が伴う場合や、講演者の人選などが難しい場合があり、今後、地域と連携して実施するなどの工夫が必要である。
- ・学校も様々に取り組むべきことが多いが、「多様性の尊重」をキーワードとして、学校の教育課程を編成していくことが大切である。

おわりに

この度、このような研究の機会を与えてくださり、研究を助成していただきました、公益財団法人みずほ教育福祉財団に深く御礼を申し上げます。また本研究をご推薦いただき、多大なるご指導、ご助言をいただき、研究の方向性を示唆してくださいました独立行政法人国立特別支援教育総合研究所インクルーシブ教育システム推進センター上席総括研究員（兼）センター長の久保山茂樹様に深く感謝申し上げます。

本校は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の会場である東京スタジアムや武蔵野の森総合スポーツプラザが隣接している、開校46年目を迎えた児童数約420名、13学級の小学校です。東京2020オリンピック・パラリンピックの開催を心待ちにしていたところですが、コロナ禍にあり、それもままならない状況となりました。そのような中で、取り組んできた研究ですが、大きな成果を実感することができました。

研究当初は、障害者理解教育は必要であるということは頭では分かっているけれども、何からどう始めたらよいのか、ゴールはどこにあるのかという見通しが立たない状態でした。そこで、教職員にアンケートを取り、障害者理解について一人一人の声を集めることから始め、それらを基に研究の方向性を探っていきました。また、講演会や授業研究に来ていただいた講師の先生方からは、自分達にはない視点からの助言をいただき、軌道修正を重ねてきました。交流活動や体験学習を進める中で一番感じたことは、相手を理解するにはまず相手を知ることが基本であるということでした。様々な立場の方と交流することで、その方の置かれている状況や思いを直接見たり聞いたりすることができ、様々なことを感じ取ったり、次に何をしたらよいのかを考えたりすることができました。また、子供たちの声から気付かされることも多く、考え方の柔軟さや感受性の豊かさに驚かされると同時に、こちらが学ぶことがたくさんありました。

研究1年目のまとめの時期に新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のための臨時休業があり、2年目に入っても予定していた交流活動がほとんどできない状態となりました。ただ、そのような状況でも子供たちとの交流を楽しみに来てくださる方々と少しずつ交流活動を再開し、学習につなげることができました。社会には予想もつかないことが起こるということ、その中で私達は誰もがお互いを思いやり、助け合っていくことが大切であるということをお子も私達も身をもって感じました。3年間の障害者理解教育を通して、障害や障害者の方を理解するということは、自分や周りの人を理解することと同じだということを実感しています。今後は、研究で培ったことを日々の生活や学習に生かしていけるよう、歩を進めていきたいと思います。

本研究に際し、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所情報・支援部 総括研究員の杉浦徹様、同研修事業部総括研究員の宇野宏之祐様、同情報・支援部主任研究員の伊藤由美様、同 青木高光様には、丁寧なご指導・ご助言を賜りました。心から感謝と御礼を申し上げ、謝辞といたします。

東京都調布市立飛田給小学校	校長	山中ともえ
	副校長	門田 英朗
	主幹教諭	岩田 順子